

---

# 11月とすべての後で

山本 水城

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

11月とすべての後で

### 【Nコード】

N5282X

### 【作者名】

山本 水城

### 【あらすじ】

マサチューセッツ州選出アーレンド・D・ライブハルト上院議員には、悩みがあった。17歳の娘、アンジェリク・マリアが、夜ごとおそろしい苦痛に見舞われることだ。それは、本来ならば、もうとくに覚醒してもよいはずの能力が、いまだ目覚めていないことから生じているのだ。——いわゆる変身能力物のパラノーマル・ラブ・ロマンスです。

## 前夜と回帰

1

痛い――

夢の中で叫んだ声なのか、それが目覚めた瞬間だったのか。  
窓からは月の光も差さない。

自分が目を開けているのは解る。だって夢がこんなにも暗い訳がないから。

背中が、手足が、身体が、裂けてばらばらになってしまいそうだ。

激痛に身をよじり、シーツをかきむしる。

痛い

痛い

痛い

痛みのあまりに、息も出来ないでいるのか、それとも、叫び声を上げているのか。

もう自分でも解らない。

ずっとずっと向こう、遠くでノックの音がする。

奇妙に不揃いな足音と、スペンサーの呼びかけ――

お父様がわたしに手を伸ばす。

大きな掌に抱きとめられる。

微かなシガーの香りのするガウンに顔を埋め、その瞬間だけ、わたしは、ほんのわずかだが安堵する。

もう大丈夫だと、耳元で言うお父様の声が、とても近くて遠い。

その大きな背中に、精一杯腕を伸ばし、懸命にしがみつकिながら、わたしは意識を失った。

## 逡巡と秩序

2

午前6時40分、スペンサーは、いつも通りに主の紅茶の準備を始めた。あるじ

アッサムがメインのモーニング・ブレンド。  
濃いめのミルクティーだ。

やがて、マサチューセッツ州選出アーレンド・D・ライブハルト上院議員が、朝食の卓へと現れた。  
銀髪がわずかに混じる琥珀色の短めの髪は、きつちりと整えられている

「おはよう、スペンサー」

朝の挨拶は、主人からと言うのが、ここ数十年来のライブハルトの家の習わしとなっていた。

仕え始めた頃は、主人に先に声をかけられることなどあつてはならないと恐縮し、使用人としての礼を失してはならぬと意気込んでいたスペンサーではあった。

しかし、主人アーレンド・ライブハルトとの間に、控えめながらも確固たる信頼としきたりを築き上げた今となつては、スペンサーも朝の主人の第一声をゆっくりと待つようになっていた。

「よく眠れたかな？ あれから」  
ティーカップに口をつけながら、ライブハルト上院議員は言った。  
その灰色がかつた緑の瞳は、いつも通り静謐に澄み渡っていた。  
だが、スペンサーはその目に充血の色があることを見抜いていた。

それはスペンサーだけが気がつくことが出来るほどの、ごく微かのものであったが……。

「十二分に休息させて頂きました、ご主人様」

スペンサーは、『ボストン・グローブ』をライブハルトに手渡す。主人が新聞を広げた隙に、キッチンへと振り返り、卵とトーストの皿を手を取った。

ライブハルトが社説のページを開いたところで、テーブルに卵とトーストを並べた。

「一度、明け方にアンジェリク様のご様子を覗きましたが、よくお休みのようでした」

スペンサーは、主人のカップを再び紅茶で満たしながら、さりげなく付け足した。

手にした『ボストン・グローブ』テーブルに置くと、ライブハルト上院議員は溜息をついた。

「だが……あれでは、身体が持つまい」

「さようでございましょう……」

スペンサーはグローブ紙を静かに折りたたむと、サイドテーブルにそっと下げた。

ライブハルト上院議員は、皿の卵に銀のナイフを入れた。

スクランブルドエッグを、これほどまでに美しい仕草で食べる紳士を他に知らない。

スペンサーは毎朝の事ながら驚嘆する。

トーストと卵を食べ終え、立ち上がりとするライプハルトの椅子を引くスペンサーを振り返り、上院議員は言った。

「ベラに連絡しようと思っている……」

黙して、視線を伏せていたスペンサーが、主に向ってごく軽く頷いた。

「それがよろしいかと存じます……薬の方も、大分少なくなってきましたので」

アーレンド・D・ライプハルトが幼い頃は、数人はいた運転手も、今ではフランツただ一人だけだ。

かつてと比べて、いくら人件費が上がっているからといって、別段、経済的に維持できないというわけではない。

もちろん、アーレンドがマサチューセッツの名門家系らしい、ごくピューリタンのな性質を持ち合せているということも、その理由ではあったが、実際、今は運転手は一人いれば十分だったのである。

最愛の妻のエリサも、とうに亡く、前当主とその妻、つまりライプハルト上院議員の両親は10年以上前に、この世を去っていた。

三人の息子達も、いまはそれぞれに家をでた。

いつもどおり、ライプハルト上院議員はフランツがドアを開いた車に乗り込んだ。

主を見送りにでたスペンサーが、自分の乗った車が見えなくなるまで、ポーチに佇んでいるだろう。

いつもどおりのことだった。振り返って確かめるまでもなく、ライ

プハルトにはそれが解っていた。

走り出して、数分の後、アーレンド・ライプハルトは、もはや身体の一部のように愛用してきたブリーフケースを引き寄せ、電話を取り出した。

「早い時間にすまない、ベラ。今話せるだろうか？ ああ、そうだ、アンジェリクのことだ……」

## 序幕と変成

3

部屋中に差し込んだ真っ白の光に、横つ面を張り倒されるような衝撃を感じて、アンジェリク・マリア・ライブハルトは目を開いた。

強い光のせいで、すべての物がかすんで見える。

しばらくすると目は慣れてきたが、アンジェリクは起き上がることはおろか、指一本動かすことすら出来ずにいた。

手も足も、頭も重い。

まるで自分の身体じゃないようだった。

——夜半に自分を襲った、あの激しい痛み。

でも、このたるさが、痛みのせいじゃないことは、アンジェリクには解っている。

一種の副作用なのだ。これは。

あの痛みを和らげるための鎮痛剤。その薬のせいだった。

起きなくっちゃ。

アンジェリクは、ヘッドボードに腕をかけ、ベッドに吸い込まれそうに重い身体を、やっとの事で引きずり上げた。

……スペンサーに、ベッドまでスूपやミルクを持ってこられたり

する前に。

一度病人扱いされては、当分ベッドから出してもらえなくなるもの。

「アンジェリク様！」

壁や手すりに寄り掛かりながら階下に降りてきたアンジェリクを、スペンサーは、すぐに見とがめて駆け寄った。

アンジェリクは、まだ、すぐにその場にくずおれてしまったとしても、まったく不思議ではない顔色をしていた。

……いくなれば執事のようなもの。

そんな一昔、いや二昔前の言葉でなら、スペンサーの立場を上手く表現出来そうだった。

アンジェリクが物心着いたときには、スペンサーはもうこの家にはいた。

いや。と言うより、この家の一部だった。

スペンサーのいないライブハルトの家など、アンジェリクには想像出来なかった。

「……お父様は、もうお出かけ？」

「はい、いつもどおりで」

支えるようにしてアンジェリクをソファに座らせて、スペンサー静かに答えた。

「ごめんなさいね……スペンサー。昨晚は」

スペンサーはアンジェリクと視線の高さを合わせるように無言でソ

ファアの脇に膝をついた。

「お加減はいかがですか？　なにか飲むものをお持ちしましょう」

陽差しを受けてきらめくアンジェリクの金の髪の輝きに、一瞬目を細め、スペンサーは立ち上がった。

「スペンサー、午後から少し出かけるわ」

フレッシュジュースのグラスを半分ほどあけたところでアンジェリクがこう言うと、スペンサーは、とがめるように片眉を引き上げた。

「心配しないで、もうなんともないもの。それに、短いアンサンブル曲を幾つか合わせるだけですむのよ」

アンジェリクのいいわけめいた言葉の終わりまで聞かぬうちに、スペンサーは言った。

「サフォーク監獄の慰問にいらっしゃる件ですね。アンジェリク様？　それは、言うなればボランティアの活動ではないですか。差しですがましいようですが、今回はお取りやめに……」

「だめ、そんな訳にはいかないわ」  
アンジェリクが不服げに、コーラルピンクのくちびるを歪めてみせる。

たいていの男は一分としないうちに、このくちびるにキスしたくてたまらなくなり、首筋がピリピリとしてくるに違いなかった。

「だって、すごく小さなアンサンプルでバイオリンはわたし一人なのよ。それに、前もって申請した人と違う人がいきなり訪問するわけにはいかないような場所よ？　ね、わかるでしょう、スペンサー」

アンジェリクのエメラルド色の大きな瞳で、両の目を見据えられ、大まじめにこう言われては、スペンサーもそれ以上の言葉は継げなかった。

小さく溜息をつき、スペンサーは微笑んだ。

「決してご無理をなさってはいけませんよ。お父様に心配をかけたくはないでしょう、アンジェリク様。今日は私がお送りします」

……でも、と言いかけたアンジェリクを遮って、スペンサーは続けた。

「そして終わったら、お電話を。お迎えに上がりますから、いいですネ？」

## 転送と邂逅

4

「聞いたぜ？ ディー・ディー DD、何をやらかしたんだ？ いや、それとも、一種の大出世かよ」

一体、もう何度目だ？ 知り合いに会う度この話だ。

まあ、それも仕方ないのかも知れない。

州警察のSTOPチーム——いわゆるマサチューセッツ州のSWATだが——から、いきなりの捜査局への異動の命令が下ったとき、誰よりも自分が一番面食らったくらいだ。

そんなルートの異動話なんて、これまで聞いたこともない。

ついこの間、27歳になったばかり。

まだまだ、特殊部隊の仕事に支障のあるような年齢でもない。

もちろん、特に希望を出していた訳でもなかった。

まさに青天の霹靂とはこのことだ。

「ドナーティ巡査長、こつちだ」

前を歩いていた巡査部長が、ドージェを促す。

巡査部長がドアをあけ、さっさと中に入っていく。

しまりかけるドアを慌てて押さえながら、ドージェも後に続いた。

増え続けるIT機器に対応するため、最近、どうやら大幅に内装を改めたらしい。

ガラスが多用された、モダンなミニマムインテリアのオフィスだった。

古くさいスチールデスクとブラインド、木のスツールといったオールドスタイルの警察事務所など、もはやアンティークなみの貴重さかも知れない。

そこに並んでいるメンツも、ドージェに言わせれば、インテリアと同様「スカしてて、薄っぺらい」連中だらけのようだった。

「ドージェ・ドナーティー巡查長だ。本日付で、特殊部隊<sup>STOP</sup>から、捜査局のうちの班に配属になる」

巡查部長は、ドージェを指し示すように軽く手を掲げた。

巡查部長の言葉に、班員たちのほとんどはデスクに座ったまま、ごく面倒そうに顔を上げてみせただけだった。

形だけでも歓迎の表情をして見せるなんて、まるで膨大な時間のムダだとも言わんばかりに。

露骨な反感を示されるわけではないが、ここまでこれみよがしの「無関心」を装われては、ドージェは、すぐにでもSTOPにとって返し、サブマシンガンを持ってきてぶっぱなしてやりたい気分になった。

灰色というか……どちらかといえば黄緑に近いドージェの瞳は、たてがみのように輝く赤銅色の髪とあいまって、彼に独特のオーラのようなものを纏わせている。

ドージェに、どことっておかしなところがあるわけでない。顔立ちはいくつきりと濃い、端正に整っているし、特殊部隊の訓練

で鍛えられた肉体は素晴らしいものだった。

端的に言って、彼は美男子だ。

だが、ドージエのたたずまいには、なにかしら、周囲の者を落ち着かない気持ちにさせるところがあるのだった。

…… いつもこいつも。

鼻白む思いで、ドージエは周囲の連中を見まわす。

全員が全員、襟にアイロンのかったシャツを着て、櫛のあたった髪型だ。

レザージャケットにラバーソールのブーツといった出で立ちのドージエは、この場では完全に浮いていた。

「レイナー。ドナーティにレクチャーを頼む」

巡査部長はメタルフレームのメガネの男に声をかけた。

メタルフレームの男、レイナーはドージエに近づいて、右手を差し出した。

「よろしく、ドナーティ。ああ、『DD』と呼んでいいのかな？」

レイナーはこう言って口の端を歪めた。愛想笑いというより、皮肉にしかみえない表情だった。

ドージエは相手の倍以上の握力で、手を握り返してやる。

「STOPでの君の『伝説<sup>レジェンド</sup>』は、ここみんなが耳にしているさ、『超人DD』。一体、なんと表彰されたっけね？ 君は」

ドージエに強く握りしめられて、しびれてしまった右手を振りながら、レイナーは「つまらない事だが」と前置きをして話を続けた。  
「捜査局のこの班は、重罪、なかでも強行犯を扱ってる。殺人やそ

れに準ずるようなね。マサチューセッツの殺人捜査がどんなものか、まあ、君も知ってるだろうけど、DD?」

いちいち厭味なヤツだ。

ドージェはレイナーの問いかけは完全に無視した。

「もちろん州警察のボストンでの管轄は、基本的に州の不動産における犯罪になるが。殺人に関する捜査権限は、実質上地区検事のものだ、つまり……ここではジェシカ・ローウエル検事が、捜査のすべてを決定できるってわけだ、捜査につくスタッフひとりひとりで口を出せる。州警察官でも市警でも選り取り見取りってわけだ」

なるほど。

だから、ここの長たる、あの巡査部長の影が、あんなにも薄いわけだ……?

ドージェは軽く鼻で笑う。

「スタッフを紹介しようか?」

レイナーの口調はいちおう試してみた、というような感じだった。

「では、願います」

この部屋に入って、ドージェは初めて口を開いた。

それまで無関心を装っていた連中が、ドージェの声に思わず反応して、一斉に顔を上げる。

ドージェの声にも、何故だかわからないが、いつも人の注目を集めてしまう類の何かがあった。

やれやれ、先が思いやられる……。

ドージェはため息を漏らした。

## 変成と安穩

5

窓を開けていたから暖房はいらない、とだけ言っと、アンジェリクはシートに寄り掛かり、目を伏せた。

まだ、本調子ではないのだろう……。

ルームミラーでアンジュの様子を窺いながら、スペンサーはイグニッションキーを回した。

ボランティアのための練習になど、今、無理をして行かなくてもよかるうに。

なるべくならば、お部屋でゆっくりしていて頂きたいのだが。こう思いながら心の中で溜息をついたが、そのような感情を表に出すことなど、スペンサーには決してなかった。

スペンサーはふたたび、ミラー越しにアンジュに目をやる。瞼を閉じ、じっとシートにもたれているようだった。

もし、観賞用に完璧な少女の人形を作るとするならば、おそらくこんな風になることだろう……。

スペンサーはアンジュを見ると、しばしばそんなことを思った。

金の髪は生まれつきの見事な巻き毛。

長いその髪は、束ねられたり編みこまれたりすることもあるが、大抵はただ自然におろされ、風に揺れてきらめく。

髪と同じ色の長い睫毛。

閉じられた瞼の奥には、深いエメラルドグリーンの大きな瞳が隠さ

れている。

服装は華美ではないが、ライプハルトの者らしく上質のシンプルなもののしか身につけない。

ライプハルト上院議員のひいきの店で仕立てさせる美しいシルエットのシャツ。

さりげなく使われるレースがヨーロッパのアンティークであるところ、控えめながらも贅沢な作りだ。

ボトムスは、あせたブルーのジーンズで、これは以前、ヘンリー・ライプハルトが、上院議員の次男が着ていたのを譲り受けてからずっとアンジュのお気に入りだ。

外出によく履くのは、山羊革のショートブーツ。

美しい焦げ茶色で、これも以前、ライプハルト上院議員が仕立てさせたものだった。

そして、そのアンジュの傍らには、いつも、飴色のすばらしい革を張ったバイオリンケースがある。

なかに入っている楽器は、さらにすばらしい琥珀色だ。

先々代のライプハルトの当主、つまり上院議員の祖父が、トリノに注文して作らせたファニヨラのプレッセンダ・モデルだった。

先々代のバイオリンはどうやら道楽にすぎず、折角の名器も彼の演奏では、奥方達の御不興を買うことしかなかった、とスペンサーは伝え聞いている。

だが、アンジュは違った。

その才能がずば抜けていることは、素人のスペンサーがみたところでも明らかだった。

現当主のライプハルト上院議員も、時折、スペンサーにだけはこう

もらしていた。

「……このファニヨラは、アンジュのために作られていたと思わないか？ スペンサー、うちの『じいさま』は、ずいぶんと用意がよかったことだ」と。

アンジュは幼い頃から、おとなしく、口数の多い少女ではなかった……。

とはいえ、その緑色の瞳は、時に言葉より饒舌に光の色を変えた。そして、もの言いたげなその瞳には、彼女が口を開くのを、思わず聞き手がじっと待ち望んでしまうような魅力があった。

淡いコーラルピンクのくちびるから、ゆっくりとあふれ出すひとことひとことに、耳を傾けなくなる。

旦那様をはじめ、アンジュ様のお兄様方も、

皆それぞれにこんな風に、どこか人を惹きつけて離さないような魅力を備えているのは、やはりライブハルトの血筋だからなのだろう…… スペンサーは、そんなことに思いを巡らせる。

アンジェリクは、まだ瞼を閉じたままだった。

このところ、薬を使う頻度が増えていた。

…… お体に、かなり負担になっているはず。

スペンサーの心に、また重いものが沈んでいった。

どうしてなのか？

…… 長子のアレックス様もヘンリー様も三番目のジョナサン様も、みんな覚醒はスムーズだった。

普通ならば思春期の頃に、目覚めるものなのだ。

アンジュ様の目覚めは、なぜこんなに手間取るのか。  
もうすぐ十八歳におなりになるというのに……。

夜ごとの、あのひどい苦しまれようは、見ている方が辛い。

スペンサーは、またルームミラーに視線を向ける。

どうかすると、まだローティーンにも見えるような華奢な身体だ。  
だが、覚醒できないのは「成熟していないからだ」などということ  
は、決してないはずだった。

少なくともスペンサーは、そう確信していた。

甘やかな香りが、車内に広がっている……。

車の窓が開けられ、微風が通り抜けているというのに、スペンサー  
にはその香りがはつきりと判った。

たまらなく甘い香りだった。甘い花のような。

ライブハルトの一族を知り尽くしているスペンサーには、この香りが  
何であるのか、間違えようもなかった。

これは、まるで生きた人形のような、あの少女から立ち上るっ  
ているのだ。

……そして、この甘やかな芳香は成熟した女性が放つもの。  
どんな異性の理性の掛けがねをも、すべてはずしてしまふ。あらが

えない誘惑の甘い香りだった。

目覚めは、もうすぐのはずなのだ。  
なのに覚醒前に特有な、あの苦痛だけがいつまでも長引くというのは、一体どうしたことなのか……。

アンジェリクが、ふと瞼を開いた。エメラルド色の瞳が微かに揺らめく。

「スペンサー？」

スペンサーは静かに答えた。

「もうすぐ着きます、アンジュ様。そういえば、今朝、旦那様が」

「お父様が？ なあに」

アンジェリクが、ゆっくりと身体を起こす。

「誕生日には何が欲しいか？ と」

「……え？」

「十一月はお誕生日月ではないですか？ アンジュ様」

スペンサーの言葉に、アンジェリクは微笑んだ。

使い古されたメタファーだが、花蕾がこぼれ咲く様子、とスペンサーは思った。

「欲しいもの……」

アンジェリクは数回瞬きをした。

スペンサーも、口元にわずかに笑みをたたえた。

「いましばらく考えるお時間がありますよ。 アンジュ様、お話の続きは、旦那様がDCからお戻りになってからになりましょうから」

## 独奏と協奏

6

「やあ！ お姫様、きょうは運転手付きでおでまし？」

アンジェリクが振り返ると、ヴィオリストのテオジーンが立っていた。

コーンローに編んだ暗褐色の髪につけた飾りをきらきらとさせて、いつもどおりコーヒーチェーンのロゴの付いた大きなタンブラーを片手にしている。

テオジーンの軽口になんの悪気もないことは、アンジェリクにもよく分かっていた。

ライブハルトはボストンの名家だ。

メイフラワー号云々というくらいまでの古い家柄で、代々連邦の上院議員を歴任している。

アンジェリク・マリア・ライブハルトという名前を聞いて、「あの」ライブハルト家のことを思い起こさないボストン市民はいない。

だからこそ、あえてアンジュをお嬢様扱いしたり、父であるA・D・ライブハルト上院議員や兄のA・ライブハルト下院議員の名前を出したりするようなことを、周囲の人々は、決してしない。

テオジーンがこんな言い方をするのは、彼の冗談好きで陽気な人柄のせいだ。

それに、彼がマルセイユ出身で、パリの国立高等音楽院とジュリア

ードを渡り歩いたのち、今はバークリーに通っているという変わり種であるせいでもあるかもしれない。

アンジェリクは、テオジーン言葉に何と応えたものかと思い、彼のチョコレートのような黒目がちな瞳を見つめた。

普通の女の子がそうであるようには、アンジュは喋るのが得意ではなかった。

色々な事を、自分の感情を。

言葉で表現するには、自分の中にいくつもの見えないハードルのようなものがある。

それは、歳の離れた三人の兄に過保護に守られてきたからなのかもしれないし、幼い頃に、なぜか寝込むことが多かったからかもしれない。

でも、喋ることが嫌いなわけではなかった。

アンジュが、自分の心の中にわき起こる様々な感情を表わす方法。それは、バイオリンを弾くことだった。ごく小さい頃から、気がつくとそうだった。

……わたしの演奏はほんとうにお喋り。

アンジェリクは自分でもそう思っている。

父もアンジュに向って、お前はバイオリンではずいぶんと饒舌なのに……としばしば口にするほどだ。

テオジーンといえば、タンブラーを持った方の腕で、アンジェリクの肩をハグし、まっ白な歯を見せて屈託なく笑っている。

……テオジーンは笑うとミシェル・バスキアに似てるわ、とアンジ

ユはいつも思う。

「アンジュ？ 顔色が悪いみたいだ。ははあ。それで『執事』が心配して送ってきたんだな」

テオジーンの言うとおり、スペンサーの手前、元気に振舞ってはみせたものの、アンジェリクはまだ身体がひどくだるかった。

テオが開けてくれたドアを通って、アンジュはスタジオの中に入っていく。

近所にはボストン音楽院やバークリーがあるから、この辺りには、こんなようなスタジオがごろごろしている。

「あれから、fbにメッセージが来てさ。ジョージのヤツ、まだ、ディヴェルティメントを演目に入れるの、諦めてないんだぜ？」  
テオジーンがタンブラーに口をつけながら言った。

おそらく、中身はいつものソイミルクのカフェモカだ。

「……Eフラットの弦楽三重奏は、わたしも好きよ、テオ」

濃紺のコートを脱ぎながら、アンジェリクは言った。

いつものトレレンチを着ようとしたところ、スペンサーに厚手のメルトンに着替えさせられたのだ。

「でも、長すぎて今回には不向きだっていうあなたの意見には賛成なの」

……三重奏のディヴェルティメントは慰問の演目としては、プライオリティが低いのではないかな？

お父様もおととい、わたしの考えに賛同の意を表明してくれたっけ。

「そりゃ、僕だって『刑務所の慰問なんだから、パツヘルベルでもやっつけば?』なんていうのはナンセンスだと思っけどね」

……そもそも、三人でやるカノンって、ちょっと気が抜けてる音だものね。

そんなことを考えながらアンジェリクは、ケースからバイオリンを取り出し鎖骨のくぼみに置いたが、口には出さなかった。

そして、袖をたくし上げようとして、ふと手を止めた。

注射の跡が、まだ腕にいくつも赤く残っている。

目にした人は、きつとぎよつとするに違いない。

それどころか、ドラックにでも手を出したのかとでも、思われかねないもの。

「で? 君はベートーベンがいいって言うんだよね? アンジユ、やっぱりエスタブリッシュメントだよ、君って」

テオジーンは明るい笑い声をたてた。

「……ありきたりだっていいたいのね? テオ」

アンジユは口ごもって、テオの目を見つめた。

テオは笑い止めて、黙った。

アンジユの次の言葉を待つかのように。

「……あのね。今回は無理なのはわかってる、でも本当はシトコヴエツキーのゴールドベルクができればよかったと思ってるの……」

テオジーンは、アンジェリクをなだめるように、また続けた。

「僕もゴールドベルグは、じっくり時間をかけて演奏したいね。暖かくなったら、外でちよつとしたイベントをやったっていいじゃない

いか？ いずれさ」

……暖かくなったら。

アンジェリクは心の中で溜息をついた。

来年の六月には、ハイスクールを卒業する。

わたしは、来年の夏には、一体どうしてるのだろう……。

誕生日に欲しいもの。

ふと、スペンサーの言葉を思い出した。

……「もの」じゃないけど、お父様にお願いしたいことはある。  
でも、それは許してはもらえないかもしれない……。

このところのわたしは、自分でもどうしたのかと思うほど変だ。

毎晩のように苦しめられる、あの痛み。

本当に、身体がばらばらになってしまいそうな。

昔からの知り合いのドクター・モーリス、アナベラは、心配いらな  
いと言ったけれど。

この頃はスペンサーやお父様も、本当はなにか不安に思っているの  
がわかる。

「それにしてもジョージ、遅いな。まあ、いつものことだけど」

テオの声で、アンジュは自分のチューニングの手がすっかり止まっ  
てしまっていたことに気がついた。

テオと視線が合ったアンジュは、黙って彼にほほえんでみせた。

## 同盟と推論

7

「お忙しいところわざわざ、ようこそ。セネター」  
上院議員

ドクター・アナベラ・モリスは、自分のオフィスに入ってきたアイレンド・D・ライブハルトを事務的な口調で迎えた。

アナベラは、州警察の科学捜査班にオフィスを持っている上席研究員だ。

かつては、臨床医をしていたこともあったが、ここ十年以上、州警察で働いている。

きっかけは、ライブハルトの口利きだった。

というよりは、ライブハルトが強くそれを望んで、実現させた。

彼はアナベラに、この地位にいてもらわなければならなかった。

「ベラ、君が『直接話を聞かない限り、もう薬は出さない』というのだから、仕方がない」

アイレンド・ライブハルトは、アナベラが席を勧めるまで腰掛けようとはしなかった。

「当然よ、あんな薬。際限もなくどんどん出せない。で？ アンジユはどうなんです？」

きびきびとしたアナベラの問いに、ライブハルトはしばし黙り込んだ。

上院でも有数の有力政治家であるライブハルトがいかなることであ

れ、こんな風に返答に窮するさまなど、他の誰も見たことがないはずだ。

「アーレンド？」

アナベラはやや声を和らげた。

彼女がライブハルトのファーストネームを呼ぶことは、たとえふたりきりだったとしても、ほとんどないことだった。

友人として、相談にのりたいのだ。

アナベラは、自分の気持ちをこのような形で表現した。

ライブハルトはすぐに、いつもの誇り高さと力強さを取り戻した。穏やかで、しかも威厳に満ちた声で、アナベラに答える。座を、聴衆を一瞬にして魅了する声だ。

「アンジュは良くない。ほぼ連日、夜中に決まって苦しがる。薬を使わないと落ち着かせることが出来ない」

「では、まだなのね……？ シェイプシフト 変身は」

「まだだ」

アナベラはひといき溜息をはき出して、デスクチェアに背中をもたれさせた。

「遅すぎるわね……痛み自体は、シェイプシフトに伴うものに間違いないと思うけど。普通なら、ひどい痛みはせいぜい数回あるだけで変体は完了する」

「理由があるとすれば、何が考えられるのだ？ ベラ」

ライブハルトの問いを受けて、アナベラは改めてデスクの上のカル

テを手取る。

「……この間も話したとおり、原因は不明よ。特段に問題は見当たらないの。ホルモンバランスも通常、血液も、内臓機能も」

ライブハルトは無言だった。

だが、その鋭い目線は、彼がアナベラの答えに満足していないことを物語っていた。

アナベラは、また溜息をつくと続けた。

「そもそもシェイプシフターの、特に女性の生理データは、確実な推論を導き出せるほどに揃ってるわけじゃないのよ、わたしの言ってること、わかるでしょう？ アーレンド」

「さもありなんだ。歴史的にも医師の資格を持つシフターというものが。多くはなかった」

「……そうね、それに、たいていの場合にはシフターに医者是不だもの」

アナベラは苦笑した。

……だって、寿命が尽きてしまうまでは、彼らはは、<sup>シフター</sup>ほとんどの身体の損傷を自分で修復できるだけの力があるのだから。

「シフターが信頼できる人間の<sup>ヒューマン</sup>医師も、ほとんど存在しない。君は非常に希有な存在だよ、ベラ」

アーレンド・ライブハルトは、わずかに微笑んだ。

ライブハルトの微笑は、昔から一種の武器といってよかった。

五十代も半ばを過ぎた男のその微笑には、年相応の渋みの中に、若い頃のままのチャーミングさも垣間見える。

その微笑みを見せつけられると……。

いつものことではあったが、やはりアナベラは下腹部に熱い痺れを感じずにはいらなかった。

「……お褒めにあずかり光荣だわ。セネタ。」  
皮肉半分にアナベラは答えた。

「ともかくシフターの女性に関しては、何らかの根拠とできるようなデータは整ってないの。だって、ただでさえ少ないシフターの内、女性はほんの2割しかないんだから……」

ライブハルトの口元から、微笑みが消えた。

「……申し訳ないけど、これがわたしの限界」  
アナベラはふたたび淡々とした口調に戻る。

「ともかく、薬はもう出せない。様子を見ないことには。どうしてアンジュを、彼女を連れてこないの」

「それは難しい、あれも、このところは不安になってきているようだ。来たがるまい」

ライブハルトは苦笑まじりに言った。

「そうことを言っている場合じゃないでしょう?! これだからシフターは……」

アナベラはここで、ひと息おいて、気分を落ち着けようとした。

「彼女には、アンジュにはまだなにも話していないのね、覚醒のことも、シェイプシフトのことも」

重苦しい沈黙が流れる。

「どうして？ 覚醒してから話すよりは、先の方がいいにきまつてる、本人のためにも。だいたい、アレックスの時はどうだったの？ アーレンド」

「アレックスはライブハルトの次期当主だ、幼い頃から言い聞かせてあつた……それに、ヘンリーとジョナサンは、それぞれ兄の目覚めを見ている」

アーレンド・ライブハルトの答えに、アナベラは軽く頷いた。

「確かに、アンジュは上の三人とは歳が離れすぎているわね……彼らはとくに家を出ているし。それでも、幼い頃に彼らのシェイプシフトを見せておけなかったの？」

ライブハルトは静かに語り始めた。

いつもの、支持者を魅了するスピーチの時のような落ち着いた声で。

「われわれは覚醒の件については、細心の注意を払って子供達を教育するのだよ、ベラ。幼い頃ころから順々に聞かせておくものだ。物心つくかつかないかの時に、しっかりとシフトを見せておく。とはいえ、周囲に何でも話したがるような分別のないときに、細かいことまで話すのは危険すぎる……ただ、覚醒直前の不安定な年頃にいきなりすべてを教えるのは、それも彼らには過酷すぎる経験になってしまうから、なるべく避けねばならない」

「……アンジュには、そんな風に教育できなかった？」

アナベラが問いかける。

「あの事件で……あの子の記憶から3歳より前のことは、すべて消

えてしまっている。それにその後は……アンジュは本当にひどいありさまだった。フラッシュバックを起こして倒れなつたのは、ほんの最近のことなのだ。ベラ」

あの事件……。

このことを思い出するときのアーレンドの灰緑の目には、何ともいえない悲しみの色が浮かぶ。

話を「そこ」に及ばせてしまった、自分の方を責めなくなるほどに見ているアナベラの方が、いつも切なくていたたまれなくなる。

アナベラも、実際のところ、その『事件』がどんなものなのかは、よくは知らない。

だが、まるで自分を守るためであるかのように、そのことを忘れさってしまっているアンジュのためにも。

そして、娘をなんとしても守りたいというアーレンドの気持ちをおしはかると……。

アナベラは、そのことを掘り返すようにしてライブハルトに尋ねる気にはとてもなれないでいたのだった。

「ともかく……」

アナベラはふたたび口を開いた。

「薬はもうそんなに簡単にだせない。それにあれは危険すぎるの、もし普通のヒューマンにでも使われたら……」

「ベラ、それについては心配ない。スペンサーが管理している」  
ライブハルトは即座に言い返した。

……シフターの自己修復力。

それが、やっかい問題となることもある。

薬というのは、結局のところ身体にとっては異物だ。

体内に入れば、人間でもシフターでも最終的にはそれを分解して無害化する働きを持っている。

ただ、シフターのそれは、あまりにも早いので、普通の人間が使うような薬は彼らにとって、ほとんど効果がないのだ。

鎮痛薬、睡眠薬、麻酔薬。まるで効かない。

……だから、シフターが医者にいきたがらないってわけなのだけど、ひどい怪我で、治療時に痛みを抑える必要があったところで、まるで薬が効かないのだから。がまんして自分で治した方がましってことだ。

とはいえ、やはりシフターにも麻酔が必要なことがある。

ベラは各種の薬品の配合を研究して、シフターに使える鎮痛剤を独自に調合していた。

しかし、それは普通の人間にとっては劇薬以外の何ものでもない……。

不用意に誰かの手に渡っては、大変な事だった。

一般になじみのない薬品でもあり、ふつうの医者が治療に手間取って大事に至りかねない。

それに、量によっては即死だ。

「……あれはアンジュの身体自体にも、良くないものなのよ。アーレンド」

アナベラは辛抱強く言い聞かせる。

……そんなことは判っている！

ライブハルトは心の中で叫んだ。

だが、あのまま苦しませるわけにはいかない。

どうすることもできないのだ。覚醒が始まるまでは。

アンジュが覚醒できない理由……。

ベラには言えないが、ライブハルトは内心、ずっと考え続けていることがあった。

それは、彼のおぞましい過去のあやまちのせいではないのかと。

それが理由だという根拠など、何もなかった。

これは、単にアーレンドの罪悪感の表れに過ぎないのかもしれないのだ。

沈み込んでしまったライブハルトの前に、とうとうアナベラの方がおれた。

「……わかったわ。少しだけよ。でも、今回出した薬がなくなったら、次はダメ。彼女を連れてきて、いいですね、セネター？」

「本当に助かる、ベラ」

アナベラがバッグから鍵を取り出し、ロッカーを開ける。

そして、その中に設置されているキャビネットの生体認証ロックを外した。

「……君が我々のような異形の化物に、理解を示してくれることに感謝する」

ライプハルトのつぶやきに、アナベラは血相を変えて振り返った。

「アーレンド！ シフターも人間<sup>ヒューマン</sup>よ、以前にも言ったけど、シフターの性質の発現は、おそらく遺伝子の問題なの」

アナベラの言葉に、ライプハルトは口元を歪めた。

気高い彼らしからぬ、苦々しい皮肉混じりの微笑だった。

「……猿と人間も、たかだかDNA1%ほどの違いだそうじゃないか、ベラ」

アナベラはアーレンドを無言で見据えながら、ゆっくりと例の薬を手渡した。

見開いた枯草色のアナベラの瞳には、悲しみとわずかの怒りが揺らめいていた。

ライプハルトはそれを受け取ると、立ち上がり、ドアへと歩き出した。

ドアを開ける前に、ゆっくりとアナベラを振り返った。

アナベラはまだ、ライプハルトを見据えていた。

「今のことは忘れてくれ、ベラ。わたしは少し疲れているようだ」

そして、アナベラの返事を待たずに、アーレンド・D・ライプハルトは、部屋を出て行った。

## 慣例と欲望（前書き）

——この回はいわゆるところの、かなり「ホット」な描写があります。あしからず、ご了承くださいませ。

## 慣例と欲望

8

部屋のドアを閉めると同時に、ドージェはその女の身体を壁に押しつけた。

ミニのワンピースの裾をまくり上げ、ヒップの方からショーツの中に手を入れる。

すでに女の身体は欲望に濡れていた。

ドージェは、なんの前戯もなしに、そのまま後ろから女の中に入った。

立ったまま、激しく犯し続ける。

新しい部署は、退屈でたまらなかった。

……尻に根が生えそうだ。

ドージェ・ドナーティは、捜査局の文書作成マニュアルをデスクの上に放り投げて、オフィスを後にしたのだった。

まったくもって、「帰宅時に、ドージェ・ドナーティ巡査長は机の上にマニュアルを放り出した」ということまで、いちいち文書にして報告しなければならないのか？　と思うほどの細かさが要求された。

警察の仕事というものは、そもそも書類作成が多い物だ。

それは、ドージェも知っている。

それにしても、捜査の連中ときたら。

他に、そんなにやることがないのか？

特殊部隊

STOPは、突発事態に備える出勤待機の時間もあるが、訓練も多かった。

武器の管理や、突入の経過報告は内勤者がかなり手がけてくれたから、ドージェは、これまで、こんなに書類仕事に忙殺されたことはなかった。

STOPの任務は自分に向いている。

ドージェはそう思っていたし、事実、STOPでは自分の『能力』を、多少なりとも何かのために活かすことができていたはずだ。

別に、『超人DD』などという、やつかみ半分につけられた二つ名に、自尊心をくすぐられていたというわけではない。

ヒーロー面して、表彰の回数を得意に思っているわけでもなかった。

業績があるなんて、そんなことは当然のことなのだ。

自分は他の隊員より、生まれもつての『能力』が優れているのだから……。

撃たれることは怖くなかった。

何丁ものマシンガンで蜂の巣にでもされない限り、自分が死なないということは判っている。

たとえシェイプシフトしていなくても、身体能力は人間ヒューマンとは比べものにならない。

シフトした時のさらなる強靱さを任務中に示すことなど、もちろん当然できることではなかったけれども……。

ドージェは繋がったまま、女を片手で持ち上げ、ベッドへと押し倒

した。

女の首筋に立てた歯が、鋭くとがり始めている。

快感が高まって、知らず身体の一部がシフトを始めていた。

女は行為に夢中で、まるでそれには気がついていない。

ドージェは、鋭い爪で女を傷つけないように、手の位置を動かす。ほどなく女は絶頂に達したが、ドージェはさらに激しく女を突き上げる。

「死ぬような目にあわせて、とか言ったな？ ベイビー、まだまだだろう？」

たとえ恋愛関係になったとしても、シフターの男はヒューマンの女とはそう長く関係をもてない。

シフターの強さに消耗して付き合えなくなってしまうからだ。どんな貪欲な女でも、いずれはシフターの男には降参してしまう。

ドージェは男盛りだった。欲望は尽きない。

このところの仕事の退屈さも、それに拍車をかける。

寝る女に不自由したことはなかった。

男達の社会のなかでは、ドージェの異質なムードは周囲の警戒をおよぼすが、女にとっては、それは甘美で危険な魅力だった。

野性的で激しい……。

だが、ヒューマンの女を心から愛したことなど、ドージェには一度もなかった。

ドナーティの家は比較的新しい移民だったが、アメリカに来る前から続くシフターの家系だった。

ドージェの頭には、昔からのシフターの掟が刻み込まれている。

つがう相手はシフターだけ。

初めて自分に抱かれる雌のシフターと「絆を結ぶ」のだ。

そして、子を生ませる。

死ぬまで、つがいの雌は自分だけのものとなる。他のシフターには触れさせない。

だが、それは困難なことでもあった。

なぜだか判らないが、雌のシフターはほとんど生まれないのだ。だから、一生つがいをもてない雄のシフターなど、ざらにいる。

それに加えて、雌のシフターは短命だった。大抵は、40歳をこえて生きることはない。

ドージェの母親も30半ばで寿命が尽きた。

シフターの雌は、常に奪い合いなのだ。

だからこそ、つがいを裏切ることには許されなかった。他の雄に身体を許すことを認めれば、それはひどいカオスになりかねない。

ドージェもまだ、つがいとなるべきシフターに出会えずにいた。

逢えばわかるのだ……。同族は。

シフターの雄共には時折、街や、場合によっては突入現場で出会うことがあった。

独特のオーラ。

そして、雄の匂いがして、すぐにそれと知れた。

自分が本当に愛せるのは、シフターの雌だけだ……。

もちろん、ドージェだって、ベッドを共にするヒューマンの女達に

なんの好意も抱いていないというわけではなかった。けっして、誰でもいいというわけではない。

心が動く相手ではないと、こんな風に欲望をぶつけることなどできようもない。

しかし、彼女たちと一生を共にするなどということは、一度たりとも考えもしなかった。

それに、安定した長い付き合いを続けること自体が、そもそも無理なのだ。

女というものは、勘が鋭い。

いずれは、ドージェが「普通」ではないことに気がつく。

その時、二人の関係を、一体どうすればいいというのだ？

ドージェの下の子は、もう何度目かのオーガズムに達して虚脱状態になっていた。

そろそろ、別の女を捜す潮時かも知れない。

情が移りすぎて、別れにくくなる前に。

女が消耗しきってしまう前に……。

ドージェがそんなことを考えていた瞬間、ベッドの下で携帯電話が鳴った。

脱ぎ捨てたジーンズのポケットに入れっぱなしにしておいたのだ。

何度か留守電に切り替わっているというのに、繰り返しかかってくる。

女から身体を離し、ドージェは仕方なく電話を拾い上げた。

「ドナーティだ」

低く応じると、スピーカーの向こうから、ひどく焦った声が返ってきた。

巡査部長のポッターだった。

「DD、すぐにオフィスに戻ってくれ……重要な用件だ」

捜査局に異動してからは珍しいことだった。

STOPにいた頃なら良くあったことだが、夜にいきなり呼び出しとは？

……何があつたのか？ などと訊いたところで無意味だ。ドージェはそう思った。

呼び出しの理由が、たとえどんなことであれ、オフィスに出向かないという選択肢など、最初から自分には与えられていないのだから。

丁度いいだろう。

どうせ退屈しきっていたところだ……。

ドージェは、脱ぎ捨ててあつた服を手早く身につけると、ベッドに女を残したまま、ホテルの部屋を出て行った。

## 光臨と帰還

9

「市警が逮捕した殺人犯が逃亡した」

ポッター巡査部長はドージェがオフィスに戻るなり、説明を始めた。

まだ、幾人かの捜査官たちがオフィスに残っている。

彼らは完璧に無関心を装いながらも、ドージェの呼び出された理由を聞き逃すまいと、全身を耳にしていた。

「逮捕は、現行犯だったらしいが……検察に引き渡す時に隙を突かれたらしい」

馬鹿が……。

逃げてどうなるって言うんだ？

ドージェは心の中で毒づいた。

一度、逮捕されているならば、最後まで逃げおおせるのは至難の業だ。

すでに、さまざまな情報が警察に蓄積されている。

ほんのわずかの油断が命取りだ。

顔写真、指紋、DNA、どこからでも足がつく。

それともそうまでして逃げなくてはならないほど、何人も殺っちまったとでもいうんだろうか。

ポッターは、ドージェの疑問を察したかのように言葉を継いだ。

「殺したのは一人だ、実の息子を殺っている……犯人はヤク中でな、錯乱もある」

「誰にかみつくかもしれないそんな狂犬を、うっかり逃すなど……」

ドージェは思わず口にした。

周囲の捜査官たちから、苦々しい笑い声がもれた。

それは、被疑者を逃した市警の失態に対してというよりは、不用意な失言をしたドージェに対してだった。

事情によつてはこち<sup>州警察</sup>らも同じように責められる立場となる可能性は、いついかなる時にも考えられるのだから。

「いま市警が体制を組んで、ヤツの立ち回りそうな先を探している……。検事が……」

ポッター巡査部長が一息ついて、口ごもった。

「……ローウェル地区検事も、今回の件を非常に重く見ている。市警の捜査とは別に、独自の捜査チームを立ち上げると連絡があった」

事務室の空気が、一瞬にして変わった。

「うちからはDD、お前が参加することになった……これは、ローウェル検事直々の指名だ。言うまでもないことだが、断れないからな」

捜査官たちは無関心の仮面を脱ぎ棄て、驚きと嫉妬と、半ば嘲笑の入り混じったようなうすら笑いを浮かべ、ドージェを見ていた。

「本部はここに置かれる。ローウェル検事はあと十分で到着するそうだ。チームには市警の刑事も出入りすることになるから」  
ポッターはここまで言い終えると、話をそれで切り上げた。

質問はなし、といった感じだった。

\*\*\*

「で、俺が行くことになったわけですね？」

リュウ・リストパト刑事は、携帯の通話をスピーカーに切り替えて、手をハンドルに戻した。

パラついていた小雨が、本降りに変わる。

フロントガラスにぶつかる雨音が大きくなった。

リュウは左手でワイパーのボタンを押した。

帰宅途中の車の中だった。めずらしく早めに帰れるところで、一杯飲みながら、録画しておいた『スティング』でも観てやろうと思っていたのに……。

「毎度のことだ、検事のご指名だから仕方ないだろ？ それに……  
逃したままじゃ、最初にヤツを逮捕してくれた古巣の連中にも顔が  
立たないんじゃないか？ リュウ」  
スペシャル・オペレーション・ユニット

サザビー部長刑事はスピーカーの向こうで苦笑していた。

「別に、俺が取り逃がしたわけじゃないんですが……」

……だいたい、移送担当の警官がぼんやりしすぎなんだ。  
リュウは最後の言葉はのみ込んでおいた。

「悪いが、そのまま向かってくれ。ローウェル検事は、五分後に州警察の本部に到着予定だそうだ」

それだけ言って、サザビーは通話を切った。

リュウはゆつくりと首を曲げて、左右を見ながらウインカーを出し、一息ため息をついた。

\*\*\*\*\*

指示された部屋に足を踏み入れようとした瞬間、ドージエはシステム担当の連中にぶつかりそうになった。急ごしらえの捜査本部に慌ただしくノートパソコンが設置されている、プロジェクターが据え付けられる。

ローウェル検事は大した人数を集めてはいなさそうだな。部屋の機材の感じから、ドージエはそう察した。

すでに入室している州警察のメンツが、とげとげしい視線をドージエに向けている。

ドージエはそれを無視し、デスクに置かれていたペーパーを手に取った。

チームの名簿のようだった。

ちらほらと、他のメンバーも入室してくる。

「ローウェル検事の捜査チームって、ここかな？」

男が、ドージエに声をかけた。

確かに、ドージエは戸口に一番近いところに立っていた。

だが、たいていの場合、見知らぬ男は、ドージエに気安く声をかけたりはしない。

自分で意識してやってるわけではないが、近寄りがたいムードを持

っているということだろう。

「ああ、そうだが」

ドージェは意外に思いながら、男の方を向いた。

上背のある男だった。

凄みすら感じられる漆黒の髪は短めにカットされている。

ドージェの目よりも、わずかに上の方にある男の瞳は、驚くほどのスカイブルーだった。

……何系だ？

ドージェには、とっさにわかりかねた。

北欧系にも見えるが……。

切れ長の目や細い顎のラインは東欧系の印象もある。

肌の色は、驚くほど白い。髪が黒いから余計にそう見えるのかもしない。

黒いタートルネックのプルオーバーの上に、黒いハーフコートを羽織っている。

スラックスではなくジーンズをはいていて、その色合いは、その男の目の色とちょうど同じくらいだった。

STOPの経験の長いドージェは、その男の身体がかなり鍛えられているらしいことも、即座に見抜いていた。

「市警殺人課<sup>ホミサイド</sup>のリストパトだ」

差し出された右手を握り返しながら、ドージェは口を開いた。

「俺はドージェ・ドナーティだ、リストパト」

リストパトの握手がしっかりとして力強かったのは、ドージェにとってさらに意外なことだった。

意外というより「違和感」といった方がいいだろうか？

こんな風に、まあ、他の者にとっては普通のことではあるのだろうが、社交的に自分に接してくる男には、なかなかお目にかからない。

不思議な男だった。

愛想がいいというのも違う。

なにかの媚だとかへつらいのようなものは感じない。

ごく自然で静かで、穏やかだった。

そう、強いていえば、この男には「静か」とか「穏やか」という表現があてはまるのかもしれない……。

「あんたの顔はよく知ってる。STOPの『DD』だろう？」  
特殊部隊

リュウ・リストパトは、軽く眼を細めてみせた。

「今は隊員じゃないがな」

ドージェがつぶやくように答えると、リュウは軽く首をひねって見せた。

と、突如、廊下に慌ただしい空気が流れ、いくつかの足音が近付いてきた。

「……女王のおでました」

リュウがドージェにだけ聞こえるような小声で言う。

ひどく低い声だ……。

ドージェは思った。

たいていのことには、心惑わされないシフターの自分が聞いても、なんとも言えない響きを感じる。

ただ、穏やかというだけでない……。

この声で説得されれば、錯乱した強行犯も銃を置くだろう。  
そんな印象の声だった。

派手にドアが開けられ、数人の男たちとともに、五十がらみの女性が入ってきた。

おそらく既製品ではない、おそろしく品のよいスーツを纏っている。

……あれがローウェル地区検事か。

ドージェが思った瞬間に、彼女が第一声を発した。

「さあ、始めるわよ、皆そろってる？ バッドボーイズ」

## 互恵と紛糾

10

「ドージェ・ドナーティ巡査長はどこ？」

会議後のざわついた室内に、女王の一声が響き渡った。場は一瞬にして静まった。

ドージェがローウェル検事の前に歩を進めた。

ローウェルは軽く顎を上げ、ドージェの黄緑がかった灰色の目を見上げて言った。

「あなたが『超人DD』ね、伝説は耳にしているわ」

……スーツだけでなく、香水の付け方まで品が良いということか。ドージェはローウェル検事の顔を見下ろした。

ごく控え目過ぎて、ヒューマンの鼻ではこの距離でおそらく香りは解るまい。

知っている香水だった。

名前は忘れたが、以前嗅いだことのある匂いだ。

「あなたが捜査局に配属になったのは、STOPには痛手でしょうけど。捜査局も優秀な人材を必要としているの、解るでしょ」

ドージェの視線を真つ正面から受け止めてもなお、女王の表情はかわらずさばさばとしたものだった。

どんな女も――人間もシフターも――ドージェに正面から見つめられれば、程度の差こそあれ、一様に女としての反応を見せるものだった。

……選りすぐり老若取りそろえた警官に、「バッドボーイズ」悪ガキたちなんて、あっさり呼びかけてみせるだけのことはある。

ヒューマンの女ながら、いい度胸だ。

ドージェは内心で、少々感服して見せた。

それにしても。

今晚は、なかなか面白いヤツらに逢うじゃないか。

検事といい、あの黒髪の……リストパト刑事？　といい。

ジェシカ・ローウェルはドージェからふと目をそらすと、また声を上げた。

「リュウ、こっちに来て？」

決して大きな声ではない。

しかし、ローウェル検事の声は、座を注意を一瞬にして集めてしまう迫力があつた。

リュウ・リストパトが、静かに近づいてきた。

「市警のリストパト刑事よ」

ローウェルがごく短く紹介した。

ドージェとリストパトが軽く頷き逢つてのを見て、「あら、もう顔は合せてるの？」とローウェルがつぶやく。

「話が早いわね。今回はあなた達で組みなさい、ふたり、歳も同じ

くらいでしょ？」

ローウェルはひと言で場を片付けると、赤毛と黒髪の大男をふたりをその場に残し、ドアへと向って靴音を響かせた。

「そうそう。捜査ではリユウが先輩なのだから、ちゃんと言つこと聞きなさい、DD」

突然立ち止まって振り返ると、ローウェル地区検事はドージェにこう言い放った。

今晚が初対面だというのに、なんて女だ……。

面食らっているドージェの返事も訊かずに、ローウェルは靴音も高らかに、部屋を出て行った。

……歳のわりには、結構いい脚してるな。

ドージェもドージェで、そんなようなことを頭の半分では考えていたのだが。

周囲の連中は、露骨なひそひそ話に興じ始めた。

リストパトといい、DDといい、ローウェルも権力にあかせてルツクスの良い男を集めるもんだな……。

……DDがSTOPを出たのって、「そういうこと」なのか？

敵意むき出しの周囲の視線など、ドージェは慣れっこだ。

隣のリストパトの様子を窺ってみるが、聞えているのかいないのか、軽く細めた切れ長の青い目からは、なんの感情も読み取れなかった。「穏やか」と「静か」に加えて、「ポーカーフェイス」だ。

ドージェはリストパトに対する印象に、またひと言付け加えた。

「ローウェル検事とは知り合いなのか？ リストパト」

自分から、相手のことについて何か質問をするなんて、ドージエには滅多ないことだった。

「リュウでいい。何度かこの手のチームに呼ばれたことがあるというだけだ」

ドージエとリュウは、部屋を出た。

駐車場へと歩きながら、リュウがドージエに尋ねる。

「ドナーテイ、STOPから捜査局に異動に？ いつ」

「つい最近だ」

ドージエはふと先ほどのローウエルの言葉を思い出した。

「捜査『では』お前が先輩、とかって言ってたな………どういう意味だ？」

リュウはポケットからキーリングを取り出しながら答えた。

「さあ、俺が以前は市警のSOUにいたからかな？」  
特殊部隊

「元ハーレーライダーか？ なるほどご同類ってワケだ」  
ドージエは目を丸くしてみせる。

初対面の男を相手にこれほど話をするというのも、自分にしては珍しいことだと思いつながら、ドージエは質問を続けた。

「で、ローウエルとはそういう仲なのか？」

リュウは黙ったまま、リモートキーで車のドアロックを解除した。

ドージエの質問は、揺さぶりをかけようとワザとしたものだったが、

リュウは相変わらず、まったく表情を変えなかった。

ふたりはリュウの黒いレクサスに乗り込む。

シートベルトのバックルを押し込んだところで、リュウが口を開いた。

「俺がそんなに要領のいい人間だったら……こんな雨降りの夜中に呼び出されて仕事するようなことになると思うか？」

リュウの答えに、ドージェは思わず吹き出した。

「それは、ごもつとも」

女をたらし込みそうな男という風には見えないが、ドージェとしては、リュウがローウエル of 愛人だったとしても、まったく不思議はないような気もしていた。

確かに、リュウ・リストパトはハンサムだ。

ローウエルが入れあげたとしてたって不思議はない。

いや、ただ単にハンサムというには、なんというかあまりにも底知れないような雰囲気もあった。

それは、ヤツの容貌のエキゾチックさからも来ているのかも知れない……。

ドージェはこんな風に思いを巡らせていた。

「家に帰る途中だったんだ、呼びつけられたのは……」  
リュウはイグニッションを回した。

「妻でも待ってるのか？」

……おいおい、俺としたことが。随分な詮索好きじゃないか？  
ドージェは心の中で苦笑した。

「映画が待ってた」

「何の？」

「……スティングだ」

「スティング？！ アンティークだな、何世紀前の映画だ」

「……ドナーティ、映画ができてから、まだやっとな百年ちよつとだ  
って知ってるか」

リュウは大まじめに受け答えたが、もちろんそれもジョークだった。

「DDでいい」

ドージェのこの言葉に、リュウは軽い笑い声で答え、アクセルを踏み込んだ。

雨はまだ降り続いていた。

「事件自体に、特段気になるところはない……な」

助手席で資料を見直していたドージェが、ぼつりと言った。

「……ドラッグで錯乱状態になった父親が、5歳の息子に銃を乱射して立てこもったっていう事件だからな。イヤになるほど」ありふれた『痛ましさってわけだ』

低い声でつぶやいたリュウの声の響きに、ドージェははじめて静謐以外のものを感じた。

「ウラがなさそうだと、言いたかったただけだ」  
ドージェは運転席のリユウの横顔を見た。

「わかってる」

リユウはギアに手をかけた。  
低く静かな声だった。

ふたりはしばらく黙りこんだ。

やがて、ドージェが再び口を開いた。

「……ラリって息子を殺して捕まったあと、やっと逃げ出したとしたら。お前はまず、どこへ行きたい？ リユウ」

「ドラッグを買いに行く」

即答だった。ジョークかもしれない。

「そこは市警がしらみつぶしにあたってるだろう？」  
ドージェが言い返す。

しばらく考え込んだ後、リユウはぼつりと言った。

「……息子に逢いに行く、かな」

「ほう？　じゃあ、そのあとでヤクだな。死体を見てブルーになるし、ヤク切れの我慢も限界ってところだ」

ドージェがまぜっかえす。

「今、息子はどこだ？」

今度は、リユウが質問を返してきた。

「さあ？　まだモルグか解剖室だろう」

「……確かめよう」  
リュウはハンドルを一度だけ切り返して、車を路肩に止めた。  
さすがは元SOUというべきか、リストパトの運転は抜群に上手かった。

ドージェとリュウは、配布資料と渡されたスマートフォンをチェックする。

「解剖はまだのようだな」  
ドージェが口にした途端、リュウが再びイグニッションを回した。

「おいおい、リュウ。普通、警官から逃げ出したヤツが、また火の中に飛び込むようなマネ……」  
ドージェは口ごもり、「ま、普通じゃない……か」と付け足した。

## 争乱と首尾（1）

11

モルグへは意外に簡単に入り込めるものだ。

死体の出入りが多く、一日中、あちこちの出入口は開いている。

そもそも、そんなに締め切っていたいような場所じゃない。

死体入りの冷蔵庫の扉をいくらしっかり閉めていても、漏れ出し、染みついた匂いは建物中にこもってしかたがない。

正面の扉は形ばかりは閉められていたが、案の定、鍵は掛かっている。  
ない。

ドージェとリュウは中に入っていく。

左側の守衛室には煌々と明かりが付いていたが、全くの無人だ。

廊下にも、この時間にはさすがにひと気はない。

ドージェは壁の時計に目をやった。

時間は0時17分。

リュウが左右に静かに視線をむけながら、一歩先を歩く。  
背後にはドージェが気を張り巡らせる。

突き当たり右の銀の扉が半開きになっていた。  
冷蔵庫のようだ。

リュウがわずかにドージエを振り返る。

ドージエは、レザージャケットの裾から覗くヒップホルスターに手を伸ばし、銃を抜いた。

ドージエが手にしているものを見るやいなや、リュウは、わざとらしく眉をひそめてみせた。

「1911? ……アンティークだな、DD」

その瞬間、くだんの部屋でなにかの機材が倒れるような派手な物音が立った。

つづいて、うめき声。

そして、男の大声がする。その意味は不明だった。

……ビンゴ。

ドージエは声にせずに口を動かす。

リュウは軽く肩をすくめて見せた。

「……装備は?」

ドージエは、小声でリュウに尋ねる。

リュウがハーフコートの下にショルダーホルスターを吊っているのは解っていたのだが。

「一応」

ひと言答え、リュウはコートの中から銃を抜き取った。

「グロックか? ……口径は」

「45」

「弾数14か……足りそうか？」

ドージエは軽く鼻で笑う。

「十二分に」

リュウには涼しく答えた。

ドージエの皮肉など、まったくの無視といったところだ。

「ショーンはどこだ、ショーン」

なかばろれつの回っていない大声がした。

「……やめろ、おい。撃つな」

男の懇願にも似た声のあとに、何かがぶつかる鈍い音。

そして、また物が倒れる音が続く。

リュウとドージエには部屋の中を見なくても、状況が手に取るように想像できた。

逃亡したヤクの切れかかった被疑者が冷蔵庫に入りこみ、止めようとした守衛が襲われている。

更に詳しく言くと、「ラリって凶暴化した被疑者に銃を奪われた守衛」が、といったところだろう。

「そうだな、撃たれちゃ困るな。まだ解剖前だっというのに、フレツシユな銃創を新たに作られてもね」

リュウが戯言めいた口をきく。

「……応援を呼びたいか？ リュウ」

ドージエはこう口にしたが、随分と気のなさそうな声だった。

「そんなの待ってられると思うか？ あいつ、なにしでかしてもおかしくなさそうだ」

リュウは即答した。

「STOPもそんなに暇じゃないし……お前さんも古巣<sup>SOU</sup>に手間かけさせたくないよな？」

ドージェも結局、そんな気はないのだ。

「ドアは一カ所、か」

リュウがつぶやいた。

「奥行きのある長方形の冷蔵庫ってとこだな。リュウ、後から入って、なるべくヤツの後ろに回れ」

ドージェの明らかな上官口調に、リュウは思わず苦笑いをもらった。

「イエッサー、『超人DD』」

ドージェはリュウの皮肉に、一瞬顔をしかめたが、すぐに指示を続けた。

「3カウントだ。俺がまず右、お前は左から……3、2、1」

ドージェのブーツの分厚いラバーソウルが、スチールのドアを蹴り開けた。

## 争乱と首尾（2）

12

半開きだったスチールドアは、勢いよく開いた。

中途半端な位置にあったワゴンがはじき飛ばされ、膿盆やピンセットが派手な音を立ててタイル張りの床に飛び散る。

ドージエは堂々と正面を向いたまま、部屋に入っていく。

撃つなら撃て、とでも言うように……。

だらりと下げた腕に銃を持ったヤク中の小汚い容疑者も、床に転がった制服姿の中年男も仁王立ちのドージエに目が釘づけになる。

その隙に、リュウは中腰の姿勢で、ドージエの背後から部屋の奥へと回った。

『超人DD』の各種のレジエ<sup>伝説</sup>ンドは、マサチューセッツの法執行者の間には、広く流布していた。

ただ、正直、リュウはそれを耳にするたび、ずいぶんと現実味の感じられない話だな、という印象を抱いていたのだった。

だが……。

現実<sup>伝説</sup>にその突入を目の当たりにして。

リュウは、それが本当のことだということを納得せざるを得なかった。

ドージェの赤銅色の髪は、鬘のように逆立っていた。壁を盾にするでもなく、腰をかがめるでもなく。

黄緑に燃える目でターゲットを見据え、真正面から銃を構えて照準を合わせる。

それはまるで、いまにも獲物に飛びかかるうする獅子のような姿だった。

一瞬、奇妙な静けさが冷蔵庫の中に広がる。

ヤク中のわめき声も、守衛の悲鳴も吸い込まれるように静まった。

「……おい」

ドージェの声が響く。

リュウには、それは声というより、短い咆哮のようにも聞こえた。

「ストーン・ジャンキー、銃を捨てろよ」

半開きになった容疑者の口から、よだれが垂れている。

リュウは素早く被疑者の真後ろに回り込み、死体の乗ったストレッチャーの間にかがみ込んだ。

そして、ドージェと視線を合わせる。

ドージェは、目だけでリュウに軽く頷いてみせる。

続いて、リュウは床に這いつくばっている守衛に視線を向けた。運良くふたりの目が合った。

リュウは、守衛に向って、掌を内側にして人差し指と中指を小さく数回曲げ伸ばして見せた。

そのジェスチャーに気付いた守衛は、なんとか氣力を振り絞り、まるで芋虫が這うような様子で、リュウの方へと身体を動かし始める。次の瞬間、トリガーガードに入っていたヤク中の人差し指が痙攣し、一発、弾丸が発射された。

——轟音。そして硝煙の匂いが立ちこめた。

跳弾が、なにかの金属に当たった音の残響が続いた。

守衛の身体はふたたび恐怖ですくみ上がり、その場から動けなくなった。

リュウは溜息を押し殺し、腕をめいっぱい伸ばして、守衛のジャケットの袖口を掴んだ。

力をこめて、守衛の身体を引っ張る。

……ドーナツとフレンチフライの喰いすぎだな。

守衛は見事な中年太りだった。

リュウは、銃を持った方の手も添えて、なんとか守衛をストレッチャーの下へと引き入れた。

守衛の安全を何とか確保し、リュウはふたたび、ドージェとヤク中の方へ視線と銃口を向ける。

容疑者かというと、自分の銃声の大きさに半ばパニックに陥っていた。

悲鳴とわめき声をあげながら、右手に握った銃を振り回している。手にしているのはグロック19だった。

グロックは、かなり強い力で引き金を引かなければ、発射されない。普通なら、暴発することは珍しい。

しかし、ヤツはもう一発撃ってしまった。

次に引き金を引くのは、より容易だろう……。

リュウは容疑者の背中を注視しながら、そんなことを考えていた。

そんな状態の容疑者に向かって、ドージエは何のためらいもなく真正面から近づいて行く。

容疑者の手にしたグロックが、ふたたび火を噴いた。

弾丸はドージエのレーザージャケットの左袖をかすり、開いているドアを抜け、廊下の壁にめり込んだ。

ドージエの二の腕から、血がほとばしる。

どういっつもりだ。あいつ……また弾に当るぞ?!  
なおもヤク中に近づいていくドージエの行動に、リュウは面喰らった。

リュウは、容疑者の背中やや下あたりに、手にしたグロック21の照準をあわせた。

特殊部隊

……SOUの任務ではないし、射殺前提には発射できない。

しかし、ヤツの動きをとめられなければ、ドージエの身が危険だ。

ドージエのジャケットの左袖が、あっという間に朱に染まる。

しかし、ドージエは蜂がさしたほどの反応も見せず、平然と容疑者の前に立った。

そして、おもむろに容疑者の手にする銃へと血まみれの左手を伸ばした。

ドージエは容疑者のグロックのスライドを握りしめた。

ヤク中は、狂ったように、引き金を引こうとするが、トリガーはびくとも動かない。

容疑者は、両手で銃を持って、ドージエを振り払おうと暴れまわった。

ドージエは手にしていたコルトガバメントをジーンズのポケットにつっこむと、両手を使って、ヤク中からグロックを奪おうとした。すると、血で滑ったドージエの左手が、容疑者の銃から離れた。

——また轟音が響く。

弾は天井の照明にあたり、ドージエと容疑者にガラスの破片が降り注いだ。

他の照明も幾つかショートし、部屋がぐっと暗くなった。

その瞬間。

ドージエの身体が、本能的に危険に反応した。

身体変身の表面に電流の走るような痺れを感じ、ドージエは自身のシェイプシフトの前兆を感じ取った。

ドージエを包む光のようなものが、薄暗い部屋の中、ほんの一瞬、微かに浮かび上がる。

ドージエは慌てて自制した。

しかし、それは、ドージエの瞳の形が変わり、きん黄金色の産毛が首筋

にきらめいた後だった。

そして、次の瞬間にはドージエの身体は、また元に戻っていた。

あいかわらずヤク中の容疑者は、危なっかしく引き金に指をかけたまま銃を振り回していた。

リュウは低い姿勢を取ったまま、しっかりとその背中に照準を合わせ続ける。

そして、ドージエと容疑者の位置関係を注視しながら、射撃のタイミングを見計らっていた。

ほんのわずかの間、ドージエの身体が横にずれた。

リュウはすかさずトリガーを引いた。

重い銃声が響き、容疑者は足を滑らせるような体勢で膝を折り、ドージエの方へと倒れ込んだ。

「……生きてるか？」

リュウは、立ち上がりながら声をかける。

「どっちがだ？」

ドージエが、倒れ込んできた容疑者の肩を片手で掴んで支えながら答えた。

そして、ヤク中の右手に握られている銃をむしり取る。

「容疑者が」

リュウが近づき、ドージエから血まみれのグロック19を受け取る。

「まあ、呼吸はしてるようだな」

ドージエが素っ気なく言い捨てた。

「あんなタイミングで撃ちやがって。俺に当てるつもりかと思ったぜ？ リュウ」

ドージェが厭味たらしく続けた。

「外しはしないさ、45ACPだし貫通もしにくいだろっ、それに……」

リュウは、腰を抜かした守衛の腕を取って、立たせながら言った。

「俺は、お前が撃たれたがってるんじゃないかとも思えたが？ 本当に無茶苦茶するんだな、DD」

容疑者の背中を布で押さえ、処置をしているドージェに、リュウがさらに皮肉な口調で言い返す。

遠くからサイレンが近づいてくる。

その音が、モルグの冷蔵庫の中にも響いてきた。

「傷は大丈夫か？ DD、出血がひどいようだが」

リュウが、蒼い目を軽く細めて尋ねた。

「……擦っただけだ」

ドージェは軽く受け流す。

怪我については、あまり詮索はされなくなかった。

なぜなら、傷自体は、もうとつくにふさがりつつあったからだ。

シェイプシフトしかけたせいで、いつもよりもさらに傷の回復が早まっていた。

リュウに傷を調べられたりしたら、不審に思われる。

それに……。

こいつは……リュウ・リストパトは、さっきの俺の様子を見ていたはずだ。

俺のシェイプシフトの前兆を……。

修羅場に動転して、何も気付かないようなタマじゃない……。

顔を合せて数時間にもならなかったが、ドージェには、リュウがその辺の凡庸な捜査官とはまったく違っていていることを感じ取っていた。

人間  
ヒューマンのくせに。

あの状態で、これだけの射撃が出来るヤツだ。なにも気付いてないはずなどない。

なのに、コイツリュウときたら、俺への態度をまるで変えることもないじゃないか？

……ポーカーフェイスにしたって、ここまで徹底できるとは！

駆けつけてきた市警の警官や検事チームの連中に容疑者の処理を任せて、ドージェとDDはモルグを後にした。

雨は上がっていた。

ふたりは、リュウのレクサスへ向って歩いていく。

すると、パトロールカーの脇に立っていた制服警官が、手にした無線機をふりながら声をかけてきた。

「リストパト！ DD！ お呼びだ」

リュウとDDは警官の方を振り返った。

リュウが警官から無線機を受け取る。

「——なかなか仕事が早かったわね、ボーイズ」  
交信相手はローウェル検事だった。

「早く帰って映画を見たかったんで——オーバー」  
リュウがわざとらしく、ひと言付け足す。

「発砲は何発？」

ローウェルが尋ねた。

「こっちは一発、向こうは三発」

リュウが手短に答える。

「そう？　じゃあわたしからのご褒美。報告書の提出は一日待ってあげるわ、オール・オーバー」

一方的に無線が切れた。

リュウはドージエを振り返る。ふたりは思わず顔を見合わせ、顔をしかめた。

無線機を受け取った警官が、忍び笑いを漏らしている。

リュウがレクサスの運転席に乗り込んだが、ドージエは一瞬、躊躇した。

血でシートを汚すかということだが、頭をよぎったのだった。

リュウは、ドージエをみて目を細め、軽く顎をあげて首をかしげて見せた。

乗れよ？　の意味らしかった。

ドージエが助手席に乗り込みドアを閉めると、リュウはすかさずイグニッションを回す。

「……高いレザージャケットだったんだが。経費で落ちないのか、これは？ 刑事っていうのは割に合わないな」

ドージェがぼつりと不満を漏らすと、リュウは軽く噴き出した。

しばらくの間、車内に沈黙が流れる。

最初のうちドージェは、自分の異常さを垣間見たはずのリュウが、あまりにも平然とした態度のままにいることに神経をぴりつかせていた。

しかし、リュウのそんな様子に、次第に不思議な居心地の良さを感じ始めてもいた。

奇妙に気があつような……。

リュウのことをそんな風にも感じていたし、自分のリュウに対する警戒心の薄さに、内心では驚いてもいた。

……まあ、映画の趣味は合わなさそうだがな。

ドージェがそんなことを思い巡らせていると、リュウが静かに話しはじめた。

「せっかくのジェシカ・ローウェル検事のご厚意だ。報告書は明日の夜にまとめるってことで、構わないかな？ DD。俺は明日の非番を満喫したい」

「俺は別にかまわんが？ よかったな、『ステイキング』が三十回くらい見られるぜ？ リュウ」

ドージェは鼻で笑いながら答えた。

「三十回、ね……。一体、何倍速で再生しろっていうんだ？ DD」  
リュウは低い声でこう言うつと、わざと乱暴にハンドルを切ってみた。

## 残響と閃光

13

その日の午後、アンジェリク・マリア・ライブハルトは、いつになくとても身体が軽い気がしていた。

昨晩は、このところ夜半に決まって起きる激痛にも悩まされなかった。

晩秋の朝の日差しは体に心地よく、今朝は、とてもすっきりと目覚めることができたのだ。

出された朝食を、しっかりと口にしたアンジュを見て、顔にこそ出さなかったが、スペンサーも安堵しているようだった。だから、アンジュがふらりと昼過ぎにひとりで出かけることにも、スペンサーはさほど目くじらをたてなかったのだ。

もちろん、風が冷たくなる前に、できる限り早く戻るようにとの条件を、しっかりと付けられはしたのだが。

楽器店でファニヨラを調整してもらい、譜面をいくつか手にいれた。本屋に立ち寄り、ジェラッテリアでお気に入りのピスタチオのジェラードも食べた。

店中にある全種類の香りを確認するくらいにゆっくりと、石鹸とコロンを選ぶ。

そして、温かい飲み物を手に『ザ・コモン』の一角へと足を運んだ。

今日の澄み切った秋空は深い色合いの青で、葉の落ちた木々の枝が、

くつきりとその青に映えていた。

あちこちから、サクソフーンやトランペットの音が聞こえてくる。

……ここで今弾いたらきつと、とても気持ちいいわね。

アンジュは傍らの飴色のケースを開いた。

コートを着たまま、琥珀色に輝く楽器を軽やかに構えて、アンジュは手早く調弦を済ませる。

チューニングに、なんの器具もいらなかった。いわゆる絶対音感の持ち主だったからだ。

自然と手が動いたのは、無伴奏パルティータ。  
Eメジャーのガボットだった。

きらめく日差しの中、ほんのりと冷たい空気が振動し、共鳴し、肌にざわめく刺激となって伝わる。

周囲の者が、ひとり、またひとりと足を止めた。

リュウ・リストパトは、清々しい空気を胸一杯に吸いこんだ。

昨晚の雨のせいで、空も空気も澄み渡っている。

公園の芝は、日差しを受けて、もうすっかり乾いているようだった。

『ステイニング』を三十回見るつもりなど、もちろん毛頭なかった。

済ませたい用事もあり出かけてきたついでに、ふと、ザ・コモンに足が向いたのだ。

……公園なんて、何か月ぶりだ？

そんなことを考えながら、手にしたコーヒーに口をつけた時だった。

腕に、背筋に。

さざ波を受けたような感触が走った。

それは、空気の振動だった。

……弦楽器の発する独特のものだ。

続いて、軽やかなバツハの旋律が、リュウの耳に届く。

リュウの視線が、自然と音の方に向いた。

まず目に入ったのは、日差しを受けてきらめく長い金髪だった。

まだ、十代だろうか？

アンティークドールのような白いなめらかな膚をもつ少女が、琥珀色に輝くバイオリンを奏でていた。

その頬は、かすかに紅潮していた。

くちびるが、ほんの僅かに開いている。

人形のような顔立ちの、そこだけが妙に官能的で、リュウの首筋はぞくりとする。

……美しいな。

リュウは素直にそう感じた。

そう、美しい。

それ以外には、思い浮かぶ言葉がなかった。

音に足を止め、いく人も人間が彼女を取り囲んでいたが、少女は旋律の中に陶醉していて、周りなど見えていないかのようだった。

ボストンでは、楽器をうまく弾く人間などそれほどめずらしくもない。

しかし、この演奏は圧巻だった。

だからこそ、耳の肥えたボストニアンが立ち止まっているのだともいえた。

三分程度の小曲は、あっという間に終わった。

周囲の人間の拍手喝采に、ふと少女が顔をあげる。

いつのまにかできていた人垣を見ると、彼女はその深緑色の瞳に驚きの色を浮かべた。

リュウは、少し離れたところで、その様子をかすかに微笑みながら眺めていた。

すると、上着の胸ポケットで、無粋な携帯がバイブした。

ポケットに左手を入れ、電話を取り出しながら、リュウは足早にその場を立ち去った。

\*\*\*\*\*

リュウ・リストパトは、夜になってふたたび家を出た。

州警察のドージェ・ドナーティのところに出向いて、昨晚の報告書

を仕上げることになっていたからだ。

レクサスに乗り込み、運転席のドアを閉めてから、リュウは携帯を取り出した。

「——DDか？ リストパトだ」

イグニッションキーを回しながら、会話を続ける。

「ああ、いまから自宅を出る。二、三十分もあればつくから……」

通話を終えて電話を切ると、リュウはアクセルを踏み込んだ。

\*\*\*\*\*

なにかが変……。

アンジェリクはそう気がついた。

なんだろう？

いつからなのか、誰かが後をつけてきている気がする。

それが男だということが、何とはなしに分った。

ひさしぶりに楽しい一日で、つい時間を忘れて夢中になってしまった。

もう日は、すっかり落ちていた。

とはいえ、まださほど遅い時間でもなかったのだ。

晩秋の日は、本当に短い……。

旧市街に入り込んでしまうと、さらに町は暗くなった。

つけてくる男に追い立てられるように、アンジュは、レンガ造りの古い集合住宅の迷路へと入り込む。

物事がよくない方へ、よくない方へと動いているのを、アンジュも心の奥底で勘づき始めている。

……どうしよう。

スペンサーに電話を。

急ぎ足で歩きながらバッグに手を入れるが、どうしても、なかなか携帯が見つからなかった。

中を覗いても、暗くてよく見えない。

アンジュが立ち止まると、つけてきた男が距離を縮めるようにどんどん近寄ってくる。

得体のしれない恐怖が、アンジュを襲った。

電話も見つけられないまま、アンジュは転がるように駆け出した。

どうしよう。

……どうしよう。

振り返ると、その男の影が次第に近づいてくる。

ふたたび、アンジュが前を向いて駆け出そうとした瞬間、目の前に

赤茶の壁が立ちふさがった。

教会の裏手の塀のようだった。

そこは、ちょうど袋小路になっていた。

それ以上逃げることもできず、アンジュは壁に背中を押しつけて、また後ろを振り返る。

曲がり角から、男がゆっくりと姿を表した。

薄ぼんやりとした街の明かりを逆光にして、その姿形は判然としなかった。

しかし、男の異様さは、そんな暗がりでも明らかに分った。

ほとんど、四つばいに近い姿勢で歩み寄ってくるその男の手は、指がなく長い爪が伸びている。

髪の毛と体毛ともつかないような毛が、頭といわず、顔といわずに、身体中に生えていた。

アンジュは自分の目に映るものが信じられなかった。

……なんなの？　これは。

人間……じゃない。まるで、獣？

いいえ、獣ですらない。

その獣人はあせる様子もなく、しかし、一步一步確実にアンジェリークに近づいてくる。

あまりの恐怖で、アンジュの悲鳴は喉の奥で止まる。

ただ、アンジュの荒々しい息遣いだけが、夜の袋小路に響く。

獣人はアンジュの目の前にまできていた。

もう、ただの真黒な大きな影にしか見えない。

顔には、それを顔と呼べるのなのであるが、夜行性の動物のように光を放つ瞳が二つ……。

ゆっくりと、その獣人がアンジュへと長い爪のついた手を伸ばした。

アンジュの恐怖は、極限に達した。

目の前に真っ白な閃光が走り、気が遠くなる……。

後頭部と背中が、何か固いものに強く打ちつけられ、そして、跳ね返される。

——激痛を感じた瞬間。

アンジュは意識を失った。

\*\*\*\*\*

旧市街の教会の前を走っていた時、リュウ・リストパトは、衝撃波のようなものを感じた気がした。  
そして、ほんの一瞬の白い光を。

数年前の、特殊部隊 SOU にいた頃の記憶が、急によみがえった。

——爆発物か？

白く光ったような気がしたのは、ただの気のせいかもしれないが……。

リュウは、それが奇妙に心にかかった。

車を止めて、外に出る。

ハーフコートの下には、ショルダーホルスターをつけていた。とりあえず、ホルスターの留め具だけ外しておく。

教会の裏手に回ろうと、足を進めたが、どうやら外からぐるりと回る必要があった。

リュウは腕時計を見る。

ドージェ・ドナーティが、州警察で自分を待っているはずだ。

数秒の躊躇の末、リュウは気がかりを晴らすことを優先させることにした。

軽く駆け足で教会の裏手へと回りこむ。

教会の真裏に行くのには、少し手間取った。

レンガ造りの集合住宅が入り組んでいて、あちこちに袋小路があったからだ。

リュウは、やっと思っていた場所にたどり着く。

とある袋小路の入口近くに、男がおおむけに倒れていた。靴の一方が、少し奥の方に落ちている。

そつと近寄り、リュウは男の喉に触れた。  
完全に失神してはいるが、脈はある。

数フィート吹っ飛ばされた、といった様子に見えた。

——なにか爆発したのか？

しかし、それにしても、火薬のにおいも、汚れも破片も、何も見当たらなかった。

リュウは用心深く、袋小路の奥へと足を進めた。

一番奥、教会のレンガ塀のところに、なにか白っぽいものがうずくまっていた。

なんだ……？！

手前には、女性用らしいバッグに、なにか不思議な形のものが落ちて  
ている。

そつ、あれは楽器の……。バイオリンのケース。

リュウは一步一步、奥へと入って行った。

「…………え？」

リュウは思わず、一声上げていた。  
そんなことは滅多にはないことだった。

目の前の地面に倒れていたものは、リュウの想像を絶していた。

——なんだ？  
これは……。

よくみると倒れていたのは少女だった。  
金色の長い巻き毛が、石畳に広がっている。

濃紺のコートが、ずたずたに裂けていた。

そのコートの上には、白い……。

リュウは自分の青い両目を、手の甲で力いっぱい擦った。

だが、目の前に見えるものに変わりはないかった。

その少女の顔には、見覚えがあった。

ザ・コモンにいた、あのバイオリニストだった。

少女。

そう呼んでいいのだろうか……？

リュウは混乱する頭で考えていた。

目の前に横たわるものを表わす言葉を……。

自分の語彙の中から、懸命に探し出す。

……そう最も近いのは「天使」だ。

リュウには目の前にあるものが、「天使」という言葉が表わすもののものに見えた。

とてつもなく奇妙ではあったが、そこでリュウは、やっと納得がい

く思いがしたのだった。

## 午睡と追跡

14

不自然な気持ちで、アンジェリクは目を覚ました。

胸の下に枕を当てて、ほとんどうつぶせに近い形で横たわっていたようだ。

身体の下になっっている方の腕の、しびれがきれている。

身体を起こそうと、ベッドのマットレスに手をついた途端、目の前が吸い込まれるように暗くなる。

その瞬間、アンジュの身体はベッドから落ちた。

床に肩をしたたかに打つけ、アンジェリクはしばらく動けなかった。

ふたたび、起き上がろうとゆっくり顔を上げると。

アンジュの目の前に、鏡張りのクローゼットの引き戸があった。

……ここは、どこ？

自分の部屋じゃない。

見覚えのない場所だ。

しかし、目の前の鏡に映ったものを見て、アンジュは思わず息をのんだ。

そこには、見慣れた自分の顔が映っていた。

ひどく青ざめた顔色をした……。

そして、その顔の後ろに奇妙な物がある。

白い……。

白い翼だった。

大きな翼だ。

……幻覚？

なにかのドラッグでも打たれたのかしら……。

突然、さまざまな憶測が、頭の中に恐怖と共にわき起こる。

どくどくと脈打つ音が、自分の耳元で激しくなる。

着ていたVネックのプルオーバーが、奇妙な形に伸びきっていた。

袋小路でのおそろしい出来事が、一気にアンジュの脳裏にフラッシュバックする。

……もしかしてレイプされたのかも。

それに……。

ここは一体どこ？

なんらかの犯罪に巻き込まれてしまったのではないかという恐怖に襲われる。

しかし、次の瞬間。

アンジュは目の前の鏡に映る自分自身の「奇妙な」姿に、ふたたび愕然とする。

痺れていない方で手で、アンジュは自分の目をゆっくりと擦った。

鏡に映る白い翼は消えない。

大きな一対の翼が、ちょうど肩甲骨のあたりから、生えるように飛び出している。

アンジュの背中を覆うくらいの長さがあった。

突然、ドアが開く音がした。

男が入ってきた。

ベッドの側の床に座り込んだまま、アンジュはドアの方を見上げた。

背が高く、黒髪の男だ。

アンジュに分ったのはそれだけだった。

その男はとても高いところから、床にへたりこんでいるアンジュを見下ろした。

本能的に、アンジュはあどすさった。

アンジュの後ろにあるサイドテーブルで、何かがぶつかる音がした。テーブルから、目覚まし時計が転がり落ちて、静かな部屋に耳障りな音が響いた。

アンジュの背中にある白い翼が、テーブルの上にあたっていたのだった。

男がアンジュに近づいてくる。

それ以上後ずさることもできず、こみ上げる恐怖に、アンジュはただ身体を硬くした。

顔を両腕で覆い、強く眼を閉じる。

自分の身体がひどく震えているのに、アンジュは気がついた。

「大丈夫。……落ち着いて」

低い低い声がした。

穏やかな声だった。

「何も怖がらなくていい。ゆっくり、息を吐き出すんだ……」

それは、何らかの訓練を受けた者の言葉だった。

混乱しておびえている者に近づき、声をかけるといふ状況に対応するための訓練を。

自殺志願者や凶器を持った犯人や精神錯乱者に近づいて、対応する必要がある人間のための……。

「そうだ……息を吐いて、その調子だ」

アンジュはゆっくりと、顔を覆っていた腕を解いた。

堅く閉じていた瞼を、ゆっくりと開ける。

目の前の、ほんの10インチほどのところに、その声の持ち主の顔があった。

見事なブルネットの短髪。

肌はとても白い。

眼はやや細くて切れ長だった。

瞳は深いブルー。

長いまつげも漆黒の色。頬に影を落としている。

……顎はすつきりとシャープで、くちびるはやや薄かった。

いったい何系なのか？

よくわからない。不思議な印象の顔立ちだと、アンジュは思った。

「肩の力を抜くんだ、そう。だんだんに力が抜けていく……」

そっぴいながら、男はゆつくりとアンジュの手を取った。

脈を診ているようだった。

アンジュはぼんやりと、自分の手首に長い指を当てているその男に目をやる。

脈を取り終えた男は、ゆつくりとアンジュの手首から自分の手を離れた。

「どこか痛むところは？」

そう、男に静かに尋ねられ、アンジュはさつきサイドテーブルに当たった翼にひどい痛みを感じていることに気がついた。

痛いって……。

これって、本物なの？

「わたし」の翼？

夢じゃないの？

ふたたび、アンジュはパニックに陥りそうになる。

男がそれに気が付き、その大きな両の掌でアンジュの顔をしっかりと挟み込んだ。

アンジュの深緑色の目から、涙がこぼれ落ちた。  
ブルネットの男は、無言でアンジュの顔を見つめていた。  
真青で切れ長の目をわずかに細めるようにして。ただじっと見つめ続ける。

互いにひとことも口を開かなかったが、アンジェリクは少しずつ気持ちちが落ち着いていくのを感じていた。

アンジェリクの涙が止まる。

男は、ゆっくりとアンジュの頬から手をほどいた。

「言葉は、解る？」

念のためとでも言うように、男は静かな低い声でアンジュに尋ねた。

アンジュは、ただ頷いた。声が上手くでない。

「俺の名前はリュウだ。君のことはなんて呼んだら？」

「……アンジュ」

やっとひと言、アンジェリクは声を絞り出す。

「アンジュ？　なるほど、ぴったりの名前だ、エンジェル」

男は微笑んだ。

「コーヒーでも持ってこよう」

そう言うと、男はアンジュを片手で抱え上げ、ベッドの上に座らせた。

それは一瞬のことで、アンジュが怯えるいとまもなかった。

……へんな人。

アンジュは部屋を出て行くブルネットの男の背中をみながら、そう思った。

背中に翼がついているような人間を目の前にして、なぜあんなに平気な顔をしてるのかしら。

それとも。

あの人はなにか知ってるの？ こうなったことに関係があるの？

そう考えつくと、アンジュはふたたびぞっとした。

……どうしよう。

どうしよう。

混乱と焦りで、アンジュの頭には何も浮かんでこない。

両手でシーツを握りしめる。

ふたたび男が部屋に現われた。

「飲んで」

大きなマグカップを差し出される。

アンジュは一瞬、躊躇した。

中身はカフェ・オレに見えたが、ほかに何が入っているかなど、解らないではないか。

じつとカップを見つめたまま、口をつけようとしないうちにアンジュを見て、男はまた軽く目を細めた。

男はアンジュを穏やかに見つめながら、黙って自分のカップに口をつけた。

ひとくち、そしてまた、ひとくちと。

男は自分のコーヒーをゆっくり飲み込んでいく。

その様子を見ているうちに、自然とアンジュもカップに口をつけていた。

びっくりするほど甘いカフェ・オレだった。

どんなに泣いて、カップに涙がこぼれても大丈夫なほどだ。

でも、その甘さと暖かさが、身体にひどくしみた。

肩から、何かほどこけていくように力が抜ける。

アンジュが半分くらいカップを空けたところで、男が静かに口を開いた。

「家に送ろうか？」

家……。

アンジュはふたたび、自分の置かれた立場にぞっとする。

こんな？　こんな状態で家に帰る？！

頭に浮かんだのは、父親のアーレンド・D・ライブハルト上院議員のこと、そして、兄のアレックスのことだった。

二人とも社会的な責任のある仕事をしている……。

わたしが、こんな訳の分からないことになってるなんて。

もし、誰かに見られたら。

お父様やアレク兄さまが、きっと困る。

でも、一体どうしたら……？！

青ざめて黙り込むアンジュを、リュウは静かに見つめていた。

……よわったな。

やはり、本人にも状況は、まるでつかめていないのか。  
心の中で、こうつぶやきながら。

——旧市街で、彼女を見つけた時。  
あのときは、本当に驚いた。

どう見ても、大きな白い翼だった。  
……彼女の背中に付いていたのは。

焦げ茶のカシミアのセーターの背中には、大きな穴が開いて、あち  
こちに白い羽が突き刺さっていた。  
コートの襟と背中中は、ずたずたに裂けていた。

彼女の背中に、突然、翼が生えてきた。  
どう見ても、そんな状態だった。

気がつくと、リュウは少女と荷物を抱え上げて、自分のレクサスの  
後部座席に乗せていた。

リュウは、その時、完全に冷静さを失っていた。  
州警察でのドージェ・ドナーティとの約束など、すっかり頭から飛  
んでいた。

今だってそうだ……。

表面上は落ち着き払ってみせていても、リュウは内心では、まだ混

乱していた。

アンジュと名のる少女の背中には、何度見ても、白い翼があった。抱えたときに何度も触れたが、本当の鳥の翼としか思えない。こんなことって……。まったく。どうなってるんだ。

「いつもそんな格好でいるわけじゃないんだ？」

リュウは冗談めかせて口にする。

——そりゃそうだ。『ザ・コモン』で彼女を見た時には、こんなものの生やしてなかったんだから。

リュウは、すぐに自分の発言に対し、心の中で異論を挟んだ。

「解らないの。わたしにもよく解らない、どうして……」

アンジュは口ごもった。そして、その後の言葉は涙にかわった。

リュウは、ひといき溜息ついた。

そして、ゆっくりとアンジュに近づいて、自分のセーターの袖口でその涙を拭う。

「もう、時間も大分遅い。誰か心配している人がいるんじゃないのか？」

リュウはアンジュに穏やかに語りかけた。

そのひとことで、アンジュはスペンサーのことを思い出した。

眉一つ動かさぬ無表情を、顔に貼り付けながらも、おそらく、心配のあまりこめかみに青筋立てているスペンサーの姿を。

連絡しないと……。

電話。

携帯、バッグは？

リュウが窓辺のソファーからバッグを取ってくる。  
黙って、ベッドの上のアンジュに差し出した。

「ありがとう……」

そして、アンジュはふと気がついた。

「……バイオリン」

「大丈夫、そこにある」

リュウは、かすかに微笑んで見せた。

さっきはあれだけ見当たらなかった携帯は、バックの中ですぐに見  
つけた。

アンジュは少し安堵した。

突然、電話の着信音が部屋に響いた。

アンジュのものではなく、その家の電話のもだった。

リュウは寝室から出ていった。

アンジュは、早速家に電話をかける。

呼び出し音が1コールも鳴らないうちに、スペンサーが出た。

「アンジェリック様？ アンジュ様ですね……いま、どちらに」

……どこ？ そんなこと。わたしにも分らない。

とにかく、いまこんな姿をスペンサーに見られるわけにもいかない。

……といっても、いつまでもここにいるわけにもいかないのだ。

「……あのね。スペンサー、もう少し帰りが遅くなるかもしれないけど、心配しないで」

アンジュはとにかく、思いついただけのことを口にした。

「もう十分遅うございます、アンジュ様。お迎えにあがります、どちらにおいでなんです?」

スペンサーの口調は、いつになくきつかった。

「とにかく、あの……、迎えはいらないわ。大丈夫なの、じゃあどうしようもなくなって、アンジュは通話を切った。

そして、そのまま携帯電話の電源も切った。

その場のぎにもほどがある……。

アンジュは自分でも、スペンサーへの説明がまったくの失敗であったことにうんざりしていた。

でもどうしようもないもの、だって……。

急にひどい眠気が、アンジュを襲った。

眠ったりしてる場合じゃないのに……。

そこまで考えたところで、アンジュは深い眠りの中に落ちていった。

リュウ・リストパートの自宅にかけてきたのは、ドージェ・ドナーテイだった。

留守番電話に切り替わった途端、ドージェの吠えるような声がスピ

ーカーから流れる。

「そこにいるんだろう？ 分ってるんだ！ でろよ、リュウー！」  
リュウは、溜息をついて受話器を取った。

「なにが二、三十分で着くだ？ もうあれから二時間近くたってるぞ！」

こう問い詰められ、リュウは返答に窮した。

「携帯には出ないし、いつたい、そこで何やってるんだ？ お前」  
ドージェの怒声が、リュウの耳を突き刺す。

「すまない、ちょっと。急な用事で……いや、トラブルと言おうか」  
リュウの言葉は歯切れが悪かった。

翼の生えた女の子が落ちてたから、拾ってきただなんて。  
どう説明すれば……？

「リュウ、明日にはローウェル検事に報告書を出さなくちゃならないんだ、忘れたわけじゃなかるう？」

ドージェはさらに詰め寄った。

「分かってる、とにかく、もうちょっと待ってくれないか。折り返しかけ直す」

いつもどおりの穏やかな低い声で、リュウは答えた。  
だが、ドージェの怒りは一向に収まらなかった。

「いや、もう待てないな、そっちに上がらせてもらっ」

「え……？」

「今、お前の家の前だ、玄関に向かう」  
こついい捨てて、ドージェは通話を切った。

表で、車のドアをたたきつける音がした。

リュウが、窓から外を覗くと、玄関に向かって大柄の男が歩み寄ってくる場所だった。

赤銅色の髪が、街灯に照らされ、燃えるように輝いている。

「おいおい、ホントかよ……」  
リュウは思わずひとりがちた。

次の瞬間、ドアベルと続いて激しいノックの音が家中に響き渡った。

玄関が開けられるまで、叩くのをやめるものが、とでもいう勢いだった。

リュウはまた溜息を吐きだしながら、玄関を開けた。

ドージェ・ドナーティは、烈火のごとく怒っていた。見るからに激怒していた。

リュウを押しつけるようにして、家の中にあがりこむ。

「何やってるんだよ？ いったい」

ドージェはさらに奥へと足を進めた。

「トラブルって何だ？ 仕事がらみなのか」

「違う、そうじゃない」

リュウは即答した。

「だったら何だ」

ドージェは寢室の前まで来ていた。

「DD、本当に悪かった。だが……ちょっと待ってられないか」

ドージェは眉をひそめてリュウの方を振り返った。

「女としけこんでるとかだったら、許さないぜ」

そして、ドージェはドアノブに手を伸ばす。

「そこには入るな」

リュウが鋭い声で止める。

しかし、ドージェは、それを無視してドアノブを捻った。

リュウがドージェの腕を掴んだ。

「やめろ、ドナーテイ」

一息、鼻で笑ってみせると、ドージェはリュウを振り払い、寢室のドアを勢いよく開け放った。

## 遭遇と衝突

15

この家に入ったときから、何かを感じていた。

俺のシフターとしての嗅覚が……。

そう、匂いだ。

こいつの家リュウに漂っている、この匂い。

甘い。

甘ったるい、この匂いは何だ？

身体中の血が泡立つようだ。

自分の脈打つ音で、ほかの音もろくに聞こえやしないほどだ。

身体が熱いのは、リュウへの怒りからだろうか。

……いや、違う。

匂いがどんどん強くなる。

甘ったるくて、気が変になりそうだ。

ここだ。

この部屋。

「そこには入るな」

リュウ・リストパートの口調が強まる。

…… 入るな？

何だ？ 何がある？

「やめろ、ドナーテイ」

気がつくと、ドージェはリュウを振り払い、ドアを開けていた。

目が回りそうなほど。

むせかえるように、甘い香りが立ちこめている。

ベッドの上からゆっくりと身体を起こす女がいる。

…… 女？ いや雌だ。

あれは、シフターの雌だ。

ドージェは、しばし立ち尽くした。

リュウのヤツ……！

ドージェの頭は、衝撃と怒り、そして、欲望で爆発しそうになる。

白い大きな翼が広がって、雌の匂いが拡散する。  
肩の付け根、首筋から、甘い花のような匂いが。

まだ若い。少女といってもいいくらいに見える。  
長い金色の巻き毛が、翼に絡み、深緑色の大きな瞳がドージェを見つめている。

淡い色のくちびるが、わずかに開く。

怒りよりもショックよりも。

欲望が、ドージェの中でさらに燃えたぎる。

ひどい物音と誰かの怒声で、アンジュは深い眠りから一瞬で目覚めた。

目覚めは、自分が眠っていたことにも、気付かないような急なものだった。

突然、ひどく乱暴にドアが開かれた。

——光の塊が入ってきた。

アンジュにはそう感じられた。

激しい炎だ。

まるで、硫黄が燃えるときの閃光のような……。

それは男だった。赤毛で大きな男だ。

その男の黄緑に燃え上がる瞳で見据えられる。

ストロベリーブロンドの髪がまるで炎のようだとアンジュは思った。

アンジュは驚きのあまり、身じろぎも出来ない。

だが……。

心の奥でなにかに気がつく。

似てる？ 誰かに。

知ってる人に、似ている？  
でも。誰に。

アンジュの脳裏に浮かんだのは、父親のライブハルト上院議員だった。

——まさか？

だってこの人は、おそろしいほど荒々しくて、刺々しくて。  
炎の塊のように攻撃的で。  
ひどく、怖い。

そう、怖い……。

ショックに続いて恐怖が、怒濤のようにアンジュに押し寄せてくる。

身体が急に反応し、アンジュは後ろに飛びすさった。

ベッドのヘッドボードに、激しく翼を打ち付ける。

ひどい痛みに、アンジュの口から思わず悲鳴が漏れる。

ドージェは、リュウの方を振り返りもせず、憎々しげな口調で話した。

「良い趣味だな……？ リュウ・リストパト。どうりで、俺を見ても何も頓着しないと思った」

「……DD、何の話だ」

リュウはいつもよりも、さらに静かに、ごく穏やかにドージェに尋ねる。

リュウの問いに、ドージェは吐き捨てるように応じた。

「……シフターとしけ込むなんてな？ 翼ある者 しかもウインガーとか」

……部屋中に満ちているこの匂い

こいつには、何も感じないのか？  
リュウ

このシェイプシフトした雌のシフターの発する、欲望の匂いを。

いますぐにでも、あのウインガーをベッドに押しつけて、思う存分に犯したいという欲求を抑え込むのに、俺はこんなにも苦勞しているというのに。

ドージェの下腹部から背中、首の付け根にかけて、電流が走る。

シェイプシフトの前兆のような……。

いや、少し違う。

もっと、ずっと痺れるような……。

……あと一歩でも、あのシフターの雌に近づけば、自分がどうなってしまうのか？

こんなにも自分を制御出来ない気分になったことはない。

ドージェは、深い呼吸をして無理矢理息を吐き出しながら、心と体の哮りを鎮めようとする。

そして、さらに厭味な口調で、リュウにこう吐き捨てた。

「まったく、ひどい匂いじゃないか。ああ、本当に『お楽しみ』中だったらしいな、リストパト」

リュウは、強い口調でドージェを遮った。

「いい加減にしてくれ、DD！　そういうんじゃない、ただ……倒れていたところを助けただけだ」

「白々しい、この部屋の匂いを嗅げば判るさ」

ドージエが鼻で笑う。

リュウがドージエの肩を掴んで、一度強く揺する。

「お前な……！ DD、だいたい、もっと他に驚くことがあるだろう？」

アンジュを見たドージエの反応は、まったくリュウの予想を超えていた。

——なんだ、こいつは？！

さつきから、訳の分からないことを……！

こんな……。

翼のある人間が目の前にいるって言うのに。

さつきからこの男は。驚きもせず、俺と彼女の関係を勘ぐってばかりじゃないか？！

ドージエが、ふと気付いたようにリュウを振りかえった。

「……本当に何も知らないのか？ リュウ。これは『ウインガー』

じゃないか」

さも意外、といった口調だった。

リュウは深く溜息をつく。

「……彼女自身も、自分の事がよく解っていないようなんだ」

アンジュは翼の痛みをこらえながら、ふたりの男の会話にじっと耳を傾けていた。

この人……？

このおそろしい赤毛の人は。なにか知ってるの？

——シフター、ウインガー？  
わたしのことをそう呼んだ。

アンジュの呼吸が苦しくなる。

息を吸っても吸っても足りない。

身体が冷たくなって、手足が痺れてくる。

リュウがはじかれたように、アンジュに近づいて、その細い肩を抱き留めた。

「……過呼吸だ。アンジュ？ 聞えるか、吸うんじゃない。吐くんだ、息を吐き出して」

リュウはアンジュの肩と背中をさすって落ち着かせる。

「DD、なにやら訳が分かってるのは、どうやらお前だけのようなんだが？ ……説明してくれるか」

リュウが、切れ長のブルーの目をドージェに向ける。  
強い視線だった。

「……説明って」

一度口を開いたが、ドージェがそこで口ごもる。

その瞬間、玄関のドアが開き、驚くほどの速さで足音が近づいてきた。

「失礼、勝手にあがらせていただきました……」

慇懃すぎるほどな口調だった。

寝室の入口に、銀髪の男が立っていた。

## 冷酷と意識

16

ドージエは自分の斜め後ろに立っている、銀髪の男を振り返った。

五十代？ いや、六十に近いのか。

細身の体を、黒のコーチジャケットで包んでいる。

背中にペイントのないレイドジャケットのようなものだ。

人間  
ヒューマンだ。

間違いはない。

感情が一切読み取れない顔。ろう人形と言われれば、そう見えるかもしれない。

だが、その男はかすかに片眉を上げて、ドージエを見た。

——俺をシフターだと気付いている。

そういう視線だった。

アンジュが、ベッドの上で小さく声を上げた。

「……スペンサー？ どうして、ここが」

ドージエは、ベッドの上へと視線を戻す。

スペンサーは、ドージエの脇を音もなくすり抜け、ベッドへと近づく。

「アンジュ様……こんな、こんなところで」

スペンサーは途中で口をつぐんだ。

——こんなところで、覚醒なさるとは。

アンジュ様の肩に手を添えているブルネットの男の方は、ヒューマンのようだ……。

スペンサーは、そう判別した。

……さて、どうしたものか。

スペンサーは、リュウに視線を向けた。

アンジュ様から、手を放せ……。

スペンサーは、無言でリュウを睨みつけた。

リュウは、その青い瞳で、スペンサーの視線を正面から受け止めた。スペンサーは、睨みつけてもまったく動じないリュウの手を掴むと、アンジュの肩から払いのける。

「アンジュ様、さあ、帰りましょう」

スペンサーはアンジュの脇に両手を入れて、抱えあげるように持ち上げた。

突然、スペンサーが現れたことにも驚いていたが、アンジュは先ほどこからの彼の言動にも、もっと驚いていた。

スペンサーが、あんな怖い表情かおをするなんて。こんな風に乱暴にわたしを抱きかかえるなんて、いつもは絶対にしないのに……。

……それに。

スペンサーはわたしを見ても、ちっとも驚いていない。

「……スペンサー、スペンサー？」

アンジュが、ふたたびおずおずと呼びかける。

スペンサーはアンジュを抱えあげる手を止めた。

「わたし……どうしよう、どうして？」

アンジュは口ごもる。

「アンジュ様。大丈夫ですから、帰りましょう」

スペンサーはそう言っ、またアンジュを持ち上げる手に力を込めた。

「いやよ……。帰るって、だって、こんな……無理だわ、このまま帰るの？」

アンジュに拒まれ、スペンサーはふたたび彼女をベッドの上に座らせた。

「……わかりました、ではシフトを解いて、いつもの姿にお戻りください。お待ちしますから」

……戻る？

平然とそう言われ、アンジュは途方に暮れた。

「どうやって？ どうやったら戻れるの？ スペンサー」

スペンサーは小さくため息をついた。

普段の彼からは、これも考えられないことだった。

「申し訳ございませんが存じません、アンジュ様。わたくしはシェイプシフトできませんので」

リュウがドージェを見つめていた。

その視線に、スペンサーも気がつく。

スペンサー、そして、続いてアンジュもドージェを見つめた。

ドージェは、一回ゆっくりと瞬きし、両手を挙げて見せた。

「まさか、これが初めて？ 今覚醒したのか……随分と遅いんだな、ウインガー？」

「『ウインガー』などと。お前ごときが気安く口にするな、この『地を這う者ブルート』が」

スペンサーが唾棄するように言い捨てた。

「お前こそ何様だ？ 『ヒューマン』」

ドージェも負けじと言い返した。

部屋の空気が、まるでショートでも起こしそうに、ピリピリとはぜる。

不穏な沈黙が流れた。

「……おい。とりあえず。彼女を何とかしてやれよ」

低い、穏やかな声でリュウが沈黙を破った。

その言葉にスペンサーが反応した。

「で、どうすれば……、シフター？」

先ほどよりも、やや丁寧にスペンサーはドージェに向かって話しか

けた。

ドージエは軽く鼻で笑ってみせた。

「そんなもの。人によって、まったく違う。ただ……」

その部屋の全員が、ドージエの次の言葉を待っていた。

「共通点があるとなれば、イメージすることだ……強くイメージしろ」

ドージエがベッドに近づいた。

アンジュのそばに控えるスペンサーを乱暴に押しのける。

ドージエはアンジュの細い顎をきつく掴み、その顔を自分の方へと向けさせた。

アンジュは、痛みに顔をしかめる。

「シフトする時は、次に移る自分の身体の状態をイメージするんだ。まず、翼に感覚を集中しろ……羽根の一本一本まで」

ドージエの強い口調に、アンジュは思わず言われるがままになる。

翼に……。

……感覚を。

「翼が消える感覚をイメージしろ。どんな風にそれが消えるか……頭によぎったビジョンを鮮明に研ぎ澄ませ」

突然、アンジュの体が激しく痙攣した。

アンジュは身をよじって、悲鳴を上げる。

「そうだ……最初は誰でも痛い。だが、そこで緩めるな。痛みに耐えて最後までイメージを続ける」

ドージェはアンジュの顎をさらに強く掴み、もう片方の手で、アンジュの肩を抑えつける。

「……神経を研ぎ澄ませるんだ、翼が消える感覚だ……それを見つけて、増幅させる！」

獅子の唸り声のように、ドージェは何度も何度も、それをアンジュの耳元で繰り返す。

アンジュが、鋭く悲鳴を上げ、DDの腕を強く掴んだ。その瞬間、翼がガラスの様に透明になる。

リュウとスペンサーが息をのんだ瞬間、透明な翼が粉々に砕けた。

舞い散った破片は粉雪のように消えていく。

数枚の羽毛が宙を舞って、ゆっくりと落ちていった。

アンジュは小さく息を吐くと、ドージェの腕の中に力なくくずおれた。

「……じき、楽に出来るようになる」

ドージェはつぶやくように言って、そっとアンジュの髪に指を滑らせた。

「自分のやり方を早く覚えることだな……」

すると、部屋の外で声がした。

「……『S』？ どうしたんですか、大丈夫ですか？」

リュウとドージェが、思わず声の方を向く。

スペンサーと同じような黒のコーチジャケット姿の男が、二人立っている。

歳はかなり若そうだった。

ドージェは嗅覚を研ぎ澄ませた。

……ヒューマンか？ いや、こいつら……ハーフブリードか。

「大丈夫だ、お前たちはもういい、帰れ」

スペンサーが短くいい捨てる、二人の男はすぐに立ち去った。

……微かにシフターの匂いがした気もしたが。

ドージェは首をひねった。

あまりにも薄くて、判然としない。

おそらく、ろくにシエイプシフトもできないような、オクトルーン  
だな……。

ドージェの腕の中で、アンジュは気を失っていた。

翼が消え、アンジュの甘い香りは、少し薄れてきた。

しかし……。

それまでかきたてられていたドージェの欲望の方は、少しも薄れて  
いたわけではなかった。

腕の中で、力なく瞼を閉じている、このウィングアの雌に……。

スペンサーが、アンジュからドージェの身体を押しつける。  
そして、アンジュを素早く横抱きにした。

「では、失礼いたします」

アンジュを抱えあげて、スペンサーはふたたび慇懃に、主にリュウの方を見ていった。

……ここが、「俺の家」だということは知っているということか。  
リュウはスペンサーの言わんとすることを、すぐさま察した。

軽やかな身のこなしで、歩み去っていくスペンサーを、ドージェが追う。

リュウもその後続いた。

スペンサーはアンジュを抱えたまま、玄関先で立ち止まり、あとを追う男二人を振り返った。

「この件については……いろいろと、ご詮索なさらない方が得策かと存じます、オフィサー・リストパト、オフィサー・ドナーティ」

突然に名指しで呼びかけられ、リュウとドージェは驚いて顔を見合わせる、

その二人の鼻先でドアを閉め、スペンサーはリュウの家を出ていった。

## 冷酷と意識（後書き）

<勝手に世界観>

シフター：人間以外の姿にメタモルフォーゼする能力を有する者の総称。ウィンガー、ブルート、ビーイングと大きく3つに分けられる。

ヒューマン：シェイプシフト（メタモルフォーゼ）しない人間のことを指す。主にシフター側から一般の人間を指すときの呼称。

ウィンガー：翼ある者の意味。主に鳥類にメタモルフォーゼするシフターを指す。ウィンガー以外が用いると、場合により蔑称的ニュアンス。

ブルート：地を這う者の意味。主に四肢動物にメタモルフォーゼするシフターを指す。やや、蔑称。けだものといったニュアンス。

ビーイング：上の二つ以外の生物にメタモルフォーゼするシフター。かなりまれ。魚、イルカ、蛇など。

ハーフブリード：シフターと人間との混血。あまり望ましいとはされないが、つがいを見つけれないシフターの雄が往々にして、ヒューマンとの間に子供を作ることがある。

オクトルーン：シフターの血が八分の一ほどしか流れていないハーフブリードのこと。シェイプシフトの能力はほとんどない。

クロス：ブルートとウィンガーとの組み合わせの結果生まれる子供

を指す。場合によっては、ブルートの中でも、獅子と豹との子供、豹と狼との子供などを指すこともある。（ドージェは後者の意味での、クロス）

ブラッデッド：純血種の意味。たとえばブルートでも、獅子と獅子同士、狼と狼同士等の組み合わせで、血統をつないでいるシフターのこと。かなり希少であるため、普通は、豹のブラッデッドにタイガー等の組み合わせが入っていても「ブラッデッド」と呼んだりする。ライブハルト家は、ホーク同士のみで血統が続いている、「スパー」ブラッデッド。

……そして、スペンサーはオールマイティ執事です。

## 傍観と主体

17

セダンの中で、二人の男がカーナビゲーションのモニターを見つめていた。

スピーカーを通して、スペンサーの声が、続いて、扉の閉まる音が聞える。

モニターに向って身を乗りだしていた男たちは、深く息を吐き出しながら座席に背中を戻した。

運転席の男は、二十代後半。

ワイドカラーのシャツに紺とラベンダーのストライプのネクタイをしている。

身にまとっているのは、見るからに生地の良い服だった。

助手席には三十を過ぎたばかりと見える男が座っている。

白のシャツにブルーのネクタイ、チャコールのスーツに身を包んでいた。

まさに、エスタブリッシュメント、そして、コンサバティブな装いだった。

しかし、シャツだけは、さりげなくショートポイントカラーを身につけており、まだ三十そこそこの、彼の若々しさを損なわない着こなしになっている。

ふたりとも揃って、蜂蜜色の髪に琥珀を思わせる瞳をしていた。

やがて、セダンの目の前のＴ字路を、黒の４ＷＤが右折していく。スペンサーの車だった。

Ｔ字路から、２００フィートほどのところに止まっていたセダンのエンジンが掛かる。

遠ざかる黒のＢＭＷのテールランプを、しばらく見つめた後、セダンの運転席の男はギアを入れアクセルを踏み込んだ。

「……どうした？ ヘンリー」

助手席の男が、静かに隣に問いかける。

ヘンリーと呼ばれた運転席の男は、黙ったままウインカーを出した。

「何か気に入らないんだな？」

ふたたび、助手席の男がヘンリーに問いかけた。

「ああ。気に入らないね、あの赤毛のシフター」

ヘンリーは苛立たしげに言い捨てた。

「……オフィサー・ドナーティか？」

助手席の男は、穏やかに応じる。

「まったく。モニターを通して、ヤツの獣臭が匂って来そうだったじゃないか？ アレク、なんとも思わないのか！」

ヘンリーはさらに語気を荒げた。

「確かに、随分とギラついたシフターだったが」

アレクと呼ばれた助手席の男は、穏やかに答えた。  
その年齢とは思えないほどの、落ち着きと説得力のある声の持ち主だった。

「あんな欲情した目で、アンジュを眺め回しやがって……『ブルー』が！」

「ヘンリー」

アレクは、ひとことヘンリーをたしなめた。静かだが有無を言わせぬ迫力がにじむ。

しかし、ヘンリーは、あいかわらずアレクに噛みつかんばかりに続けた。

「あんな奴に、アンジュのリバーズを手伝わせて……腹が立たないのか？ アレク！」

「……仕方あるまい、あの場に私たちが踏み込むべきではなかった、スペンサーの配慮は正しい」

「そりゃ、アレクはそうかもしれないが。僕は構わなかったろう？！ 僕だけでも……」

「ダメだ」

ヘンリーの言葉をアレクが遮る。

「それこそ、躰を済ませていない『鷹』を、狩場に放すようなものだからな……」

アレクは微笑しながらこう言ったが、声の響きは鋭かった。

ヘンリーはアレクの言葉に一瞬ひるんだが、そこで引いたりしな

かった。

「アレク、ライブハルトの一族は、ウインガーの血統を守ってる『ブラッデッド』だ！ それをあんな『クロス』なんかに……」

「ヘンリー！ 口を慎め」

アレクの声が叱責に近くなる。

その迫力に、ヘンリーもさすがに口をつぐんだ。

しばらく、すねるように黙り込んだ後、ヘンリーがふたたび口を開く。

「……あんなやつ。金輪際、アンジュに指一本だって、触れさせるものか」

先ほどよりも、ずっと語気を弱めて、ヘンリーは言った。  
それは、まるでつぶやきのようでもあった。

\*\*\*\*\*

玄関ドアのずっと向こうで、車のドアが閉まる音がした。  
エンジン音が響いて、遠ざかっていく。

「……じゃあ、行こうか？ DD」

リュウ・リストパトは、赤毛のシフターを振り返って言った。  
いつもどおり、穏やかな口調だった。

「え？」

ドージェ・ドナーティは、不意を突かれたかのような反応をした。

「州警察へ。報告書を書きに」  
相変わらずの低音、身体に響くようなリュウの声だった。

ガレージに向って歩きながら、ふと気がついたように、リュウがドージェに尋ねる。

「お前、車は？ DD」

「ああ、あれで来たんだ」

ドージェがガレージの手前に止めてあるバイクを指さす。  
リュウは視線を向けた。

——ドウカティの1100CC……?! しかも色は真紅だ。

リュウは、思い切り嘖き出した。

声を上げて笑い転げる。

「……何がそんなに可笑しい？」

ドージェはかなり気分を損なったが、あまりに派手なリュウの笑いように面食らってもいた。

「……いや、すまない。DD、ああ、なんというか」

リュウの謝罪の言葉は、ふたたびわき起こる笑いで途切れる。

「まったく……DD。すごく『らしい』よ。真紅のドウカティが、ダメだ……可笑しくて。ああ、そうだろうな。絶対、色は『赤』だな、お前なら……」

ドージェは、無言でリュウの笑いの発作がおさまるのを待っていた。

やがて、リュウはやつとのこととで笑いを抑えた。

そして、苦しそうに喘ぎながら、こう言い足した。

「……これは凄く、女にモテそうな感じだな、DD」

リュウの黒のレクサスの後ろを、ドージェの赤いドウカティ・モンスターが追う。

——さすが元SOUだな。  
スペシャル・オペレーション・ユニット

ドージェはリュウを追いながら、そう独りごちた。

SOUは、元々是一種の機動隊だ。

だから、特殊部隊以外の任務で主なものは、今でもハイウェイパトロールだ。

ドージェが、リュウに向って「元ハーレーライダーか」と言ったのはそういう理由だった。

リュウの家は、ダウNTOWNからかなり離れていた。

バイクで来たというのに、ドージェは、リュウ本人が言ったように「二、三十分」程度では、そこには着かなかった。

しかし、リュウといえば、あらゆる道とその状況を熟知していると見えて、あっという間に州警察に近づいていく。

……信号が変わるタイミングすら、知ってるとでも言わんばかりだな。

ドージェの頭をそんなことがよぎる。

実際、リュウの家から州警察までの間、ふたりは、ほとんど赤信号

にかからなかった。

それでも、リュウとドージェが州警察の捜査局についたのは、夜半に近かった。

ドージェの在籍する、例のミニマムインテリアのオフィスには、捜査員は誰も残っていない。

ドージェは、少しほっとする。

リュウとふたり、同僚の好奇の目に晒されながら、面倒な書類仕事をするのは、さすがにうんざりだったからだ。

しばらくの間、キーボードを打つ音だけが、人気のないオフィスに響いた。

——さすがに、こいつは、書類仕事も慣れたものだな。

絶え間なく、キーボードを打ち続けるリュウを横目で見ながら、ドージェは思った。

「寝てる仲なのかと思った……」

ドージェが、ぽつりと言った。

リュウは一瞬の間を置いて、ドージェを振り返る。

「ひどい匂いだったからな……てつきりセックスの最中だったのかと。まさか覚醒したばかりだったとは思わなかった」

ドージェが続けて言った。

リュウはキーボードから手を離し、立ち上がった。

「……コーヒーが飲みたくないか？ DD」

ドージェは黙って頷く。

リュウは他人のオフィスのコーヒーマシンだというのに、妙に慣れた手つきでセットし始める。  
程なく、コーヒーのこうばしい香りが部屋に広がった。

「匂い匂いって、D D。お前……そんなに俺の家が臭いとも言いたいのか？」

リュウはサーバーにコーヒーが抽出されていくのを見つめながら言った。

ドージェは、目を見開いてリュウの方を向いた。

「おい、リュウ、お前は何も感じなかったって言うのか？ ああ、甘ったるい……」

「甘い……？ ああ、彼女のことか。確かにプルメリアみたいな甘い香りがしていたが」

だから何？ とでも言いたげに、リュウは両手を軽く広げて、わずかにブルーの目を細めて見せた。

——いくらヒューマンだからと言って、あの匂いにまったくの無反応でいられるわけもなからうに……？

ドージェはリュウのポーカーフェイスぶりに、気持ちがいラついてくる。

「リュウ、俺のことはどうするつもりだ」

ドージェは、ずばりと確信に切り込んだ。

コーヒークップをドージェに差しだそうとしたリュウの手が、ふと

止まる。

「さあ……どうもこうも」

そういつて、軽く笑うと、リュウはドージェの机にカップを置いた。

「たった一日かそこいらのことだったが。D D、お前が優秀な警官だつてことは、俺は十分実感した……」

リュウはそう言うと、自分のカップを口に運ぶ。

「実際、シフターってのが何なのか、俺には皆目見当も付かないが。さっきの……アンジュ？ みたいに身体がメタモルフォーゼするってことだと思えばいいのか？」

——なんだつてこんなに、平然としていやがるんだ、こいつは。

ドージェはリュウに対してこう思うのが、自分でももう何度目か解らないほどだった。

「……傷が治り易かったり、突入が超人的だったりするの、そのせいなんだろう？ D D」

リュウは、言葉を選びながら続ける。

「まあ、だったら、それはそれでいいんじゃないのか？ 任務上は不都合っていうよりも利点なわけだから……俺たちが組んだのも臨時のことだし。忘れて欲しいなら、すべて忘れるさ」

ここまで言つて、リュウは、急いで付け足した。

「誤解するな、D D。これは別に脅しじゃない」

黙りこくっていたドージェが、ふと口を開く。

「……じゃあ、あの女のこともいいんだな？」

「え？」

今度はリュウの方が、目を見開いた。

「だったら……あれは、俺のものにする」

ドージェがリュウの瞳を真っ直ぐに見据えた。

「俺には『つがい』が必要だ……同族<sup>シフター</sup>の。雌のシフターは雄の五分の一ほどだ、めったには手に入らない」

「DD、彼女が誰なのか、詮索するなと言われなかったか？ あのレイドジャケットの男に」  
リュウはふたたび目を細めて見せた。

「訳ありなのは、承知の上だ……俺は『あれ』が欲しいんだ」  
きっぱりと言い切ったドージェに向って、リュウは片手を上げて、掌を軽く振る。

——好きにしろよ、の意味だろうか？  
ドージェは推し量る。

……いいさ、好きにさせてもらおう？

\*\*\*\*\*

ヘンリーがライブハルトの家のガレージに、銀のジャガーを突っ込んだ。

かなりの運転の荒っぽさに、助手席のアレクが顔をしかめる。

セネター

父とアレクは、なるべく国産車を使うと決めているようだったが、ヘンリーは、それには頓着しなかった。

わざと、国産車を避けているといっても良いかも知れない……。

——バイ・アメリカン？　それがなんだ。僕は政治家じゃない。

ヘンリーが政治の道に進まなかったことは、自身の意思だった。

——それに強制もされなかった。

強制されなかったこと……。

それはヘンリーにとっては、一種、期待されなかったことと同じに思えた。

父親から、何の期待も。

兄のアレクは、非の打ち所のない跡継ぎだった。  
完璧すぎるほどだ。

——強いてアラを探すなら……。

ヘンリーは思い浮かべる。

……三十すぎても、まだ「つがい」が見付からないことぐらいか？

ヘンリーはこみ上げる笑いをこらえる。

それは、同様に「つがい」の見付からない自分に対する、嘲りの笑いでもあった。

古い一枚板で出来た玄関の扉を押し開けて、アレクとヘンリーは館の中に入っていく。

スペンサーが、二人を出迎えた。  
すでに、いつもどおりのダークスーツにネクタイ姿だった。

「アンジュは？」

差し出されたスペンサーの手にトレンチコートを置きながら、アレクが尋ねた。

「眠っていらっしやいます」

スペンサーはすぐに続けて、ヘンリーのチェスターフィールドコートを受け取る。

アレクは、リビングルームに入っていく、ソファアのいつもの場所にゆったりと腰を下ろした。しっとりと美しい焦げ茶のスウェードのソファアだ。

ヘンリーは立ったまま、マントルピースに肘をつき、頬杖をつく。

スペンサーがアレクの前に、カットグラスを置いた。  
滑るようなめらかさだ。

そして、ヘンリーには、フルートグラスを手渡した。

アレクにはストレートのスコッチ、ヘンリーにはシャンパン。

ふたりが、何も言わずとも、スペンサーはただちに用意した。  
まるで、魔法でも使って宙から取り出すかのように。

ほんのわずかの間、待たされることもなかった。

スコッチをひとくち口に含んでゆっくりと味わってから、アレクはふたたびスペンサーに向って尋ねる。

「セネターにこの件は？ スペンサー」

「まだ、何もお伝えしておりません。わたくしの独断でございます」

「スペンサー、お前の判断は正しい。今は超党派の話し合いが佳境のはずだ、大統領が強く押している法案だから……」

アレクは、多忙な父の手を煩わせるまでもない、とでも言いたげだった。

「すまなかった、スペンサー」

続けて、アレクはスペンサーをねぎらった。

「本来ならば、私たちが妹の側にいてやらなければならなかったというのに……」

「アレックス様……」

スペンサーが恐縮した声を上げる。

「アンジュにも、心細い思いをさせてしまった……」

アレクは微かな溜息を漏らす。

マントルピースの上にフルートグラスを置くと、すかさずヘンリーもスペンサーにぞんざいに尋ねた。

「アンジュは、ずっと具合が悪かったっていうじゃないか？ どうして報せてくれなかった、スペンサー！」

「申し訳ございません、ヘンリー様。旦那様がおふたりにはお伝えしなくて良いと……」

スペンサーが言いにくそうに口にする。

「やめろ、ヘンリー。私たちがもっとアンジュを見ているべきだったのだ。このところすっかり、ここから足が遠のいてしまっていたからな」

アレクが口を挟んだ。

「それはそうだが、アレク……」

ヘンリーは言い返そうとして口ごもる。

もつと側に……。

アンジュの側に。

それができれば、どれだけ良いか。

側にいたくても、それはできない……。

アレクはどうかは解らないが、僕には……。  
辛すぎるのだ。

自分を抑えるのが……。

アンジュの、あの甘い香りが。

成熟した同族の雌から立ち上る甘い香りに、自分を抑えることが出来なくなる。

「……アレク、アンジュを他のシフターに渡すなんて、僕には我慢できない、なぜアンジュとつがってはならない？　だって、あれは

……」

ヘンリーは思い余ったように口にした。

「ヘンリー！」

アレクが一喝する。

けっして、大声ではなかった。

しかし、それは名門ライプハルト家の次期当主としての威厳に満ちており、スペンサーですら、手にした銀の盆を取り落とさんばかりの迫力があつた。

「いいか、ヘンリー。アンジュは『妹』だ。セネターの言ったことを忘れたのか？ 『決してアンジェリクとつがってはならない』と」

「アレク！ でも、実際はそうじゃ……」

ヘンリーが言い返した瞬間、アレクはソファから立ち上がった。

無言で佇むアレクの全身から、金色の霧のような光が立ちのぼる。

アレクの圧倒的なオーラに、ヘンリーは、それ以上、もうなにも言い返すことが出来なかった。

やがて、アレクを包む金の光が消えていった。

「……スペンサー」

突然、アレクに声をかけられたスペンサーは、ほんのわずかに動揺したものの、すぐさま静かに答える。

「はい、アレックス様」

「今晚はここで休む。明朝、アンジュの様子を確かめたいからな。わたしの部屋を整えてくれ」

スペンサーにこう言うと、アレクはヘンリーに背を向けた。

「お部屋はご準備できております。アレックス様」

そう言って、スペンサーはアレクの前に立って歩き出す。

そして、スペンサーはリビングルームの扉を、アレクのために静かに開いた。

## 共振と適合

18

市営の緑地である『ザ・フェンズ』の北東の端で、男の変死体が発見された。

ちょうど、リュウがデスクに座ってコーヒーに口をつけようとしたところで、911を受けた指令センターから入電があった。

ブラインドの向こうでサザビー部長刑事が、チエシヤ猫のように笑っている。

「いま、コーヒー飲もうとした暇なヤツら、さっさと現状に向え！」

サザビーは、殺人課のオフィス全体に向かって、こう一声吠えた。

リュウが到着した時、現場にはパトロールカーが何台か停まっていた、制服警官がせっせと立入禁止テープを張り巡らせていた。

野次馬はまださほどの数ではなかった。

現場にまっさきに到着していたパトロール警官から、事情を聴く。

「散歩中の老人が見つけて通報を……ともかく状態がひどくて」

リュウが手袋をはめ、死体にかけられていたシートをめくる。

バーンコート、おそらくはベージュかグレーの。

コードロイのストラックスにクラー克斯のスリッポン。

何の変哲もない三、四十代とおぼしき中年男だった。

ただし、殺され方は尋常ではなかった。

腿の動脈が両足とも切断され、同様に両手首、そして頸動脈が、それぞれ、見事に切り裂かれていた。

これでは、あつという間に、失血死したことだろう。

——死ぬ方に見れば、これは意外と楽だったかもしれないな。即死に近くて……。

リュウは頭の片隅で、そんな感想を抱いた。

本人は苦しまなかったかもしれないが、この死にざまを見せられる方は、たまったものではなかった。

どうやら、ここで殺されたらしい。

いくらかは土に染みただろうが、おびただしい血痕が被害者の周辺の落葉の上にゼリーのように固まっていた。

おそらくは、白っぽかったであろう被害者のバーンコートは、ほぼすべてが血でどす黒く染まっている。

ひんやりと冷たい空気の中にあつてさえむっとくるような、錆びっぽい血の匂いが、一帯にたちこめていた。

「第一発見者、話を聞ける状態？」

パトロール警官に向かって、古参のマンチ刑事がぶっきらぼうな声を上げる。

「おそらく、大丈夫です……」

そっぴいながら、まだ若い、二十歳そこそこのパトロール警官は、背後を親指で指し示した。

パトロール警官の指し示した先には、八十代の男が立っていた。

杖をついてはいるものの、顔つきはしつかりとして、矍鑠としたものだった。

対照的に、そのパトロール警官の方が、今にもその場で嘔吐して卒倒しかねない顔色をしている。

リュウは第一発見者の方へと向った。

「市警殺人課のリストパトです」

バッジを見せて、老人に短く挨拶をする。

「発見した時の状況をお聞かせ願えますか？」

老人はニヤリと笑ってみせると、澆刺と言っていいほどの張りのある声を上げた。

「あの坊やは、今にもゲロを吐いてぶっ倒れそうじゃないか？ 最近の市警はあんな軟弱なのしかおらんのかね？ 刑事さん」

あんたが元気すぎるんだよ……と心の中で呟きながら、リュウは咳払いを一つして見せる。

「おいおい。お前さんは大丈夫か？ ああ、あんたは随分と色白なんだな？」

「ご配慮をどうも。この仕事は長いですから。少なくとも彼よりは」リュウは手にしたペンで、背後の制服警官をさし示して見せた。

「ええっと、ミスター？」

「レイノルズだ、ジャック・レイノルズ、今年で八十八になる」

リュウは、レイノルズの手首に覗くタトゥーに、目がとまった。  
第二次大戦経験者ってわけか。

……どうりで、死体慣れしてるわけだ。

そのリュウの視線に、レイノルズは鋭く反応した。

……おや、お前、若いのに話がわかりそうな刑事じゃないか？  
という表情を見せる。

レイノルズから最大限の協力が得られるであろうことを、リュウの方も確信した。

\*\*\*\*\*

ベンチの上の枯れ葉を一枚拾い上げる。

アンジェリク・マリア・ライブハルトは、手にした落葉に少しの間、  
視線を落した。

どこかから、かすかにサイレンの音が聞こえる。

気温は四十度そこそこだった。

晴れわたってはいても、ベンチに腰を落ち着けようとする者はあまりいない。

分厚いダブルコートの特グルをしっかりと首元までとめ、アンジュはベンチに腰を下ろす。

手にしたホットチョコレートのカップに、ゆっくりと口をつけた。

細長い、川にも似た水辺には、さざ波一つたっていない。

兩岸の木々と空の色のすべてが、水面に映りこんでいる。  
その上を水鳥たちが滑っていく様子は、まるで空を泳ぐように見え  
た。

水辺に目をやりながら、ここ数日に起きたことをアンジュはぼんやり  
と思い返していた。

どれもこれも、今となっては奇妙に現実感が薄かった。

アンジュが、このひと月近く苦しめられていた夜半のあのひどい激  
痛は、嘘のようになくなっていった。

……あの夜以来。

初めてシェイプシフトした<sup>変身</sup>、あの夜からは。

翌朝、目を覚ますと、兄のアレックス・ライブハルトとヘンリー・  
ライブハルトが枕元でアンジュを見つめていた。

兄二人がめずらしく家にいることに、アンジュは驚き、そして喜ん  
だ。

身体を起して、兄たちに抱きつこうとしたところで、アンジュの脳  
裏には、すぐに前の晩のことがよみがえってきた。

アレクがアンジュの肩を抱きとめ、耳元でささやくように言った。

「アンジェリク、なにも心配はいらない。やっと『目覚め』たのだ  
から……」

そして、妹の震える背中を、掌で愛撫した。

「……目覚め？」

アレクが意味しているのは、いま、自分が眠りから目覚めて起き上

ったことではない。

そのことは、アンジュにもぼんやりと判った。

「そばにいてやれなくて済まなかった」

アレクは、妹を抱く腕をゆっくりとほどいた。

そして、アンジュの深緑色の大きな瞳を、覗き込むように見つめた。

「そう。やっと覚醒したんだ、アンジュ。私たちと同じように……」

兄たちの話は、アンジュの想像をはるかに超えるものだった。

アレクとヘンリーが嘘をついているとは思えなかった。

だが、これまでアンジュが考えもしなかったような話が、アレクの口から次々と発せられる。

これが、兄アレクの言葉でなければ。

おそろしいほどのスピーチの巧手、父と同じ魔法の声を持つアレックス・ライブハルト下院議員の言葉でなければ、アンジュも、そう簡単には、その内容を信じることなど出来なかったに違いなかった。

シフター、ウインガー……。

突如、燃えるようなストロベリーブロンドの男が、あの夜口にした言葉が、アンジュの頭の中を回る。

その声は、とても遠いところから聴こえてくるようであり、ぞっとするような現実感もあった。

アンジュは固く瞼を閉じ、両手でカップを握りしめる。

じつと部屋にいと、あらゆる方向からいろいろな考えが押し寄せくる。

自分がつぶされてしまいそうだった。

自然と、アンジュの足は建物の外へと向きがちになる。

アンジュは軽やかぶりを振って、バッグから譜面を取り出した。

気温は低いが、風はほとんどない。

日差しは、楽譜を見るのにちょうどいいくらいだ。

——何かしていれば。

いやなことを考えなくてもすむもの。

譜をみた瞬間から、アンジュの頭の中でチェロ、ヴィオラ、そして自分のバイオリンの音色が溶け合って流れだす。

アンジュはしばし心の重荷から解放されて、溶けて絡み合う旋律の中にたゆたった。

しかし、そのまどろみにも似た陶酔は、水面をわたる突風により妨げられた。

不意に一瞬だけ吹き付けた風が、アンジュの手から楽譜を奪い取り、宙にまき散らす。

何枚かが、高く高く舞い上がった。

\*\*\*\*\*

白いものが、落ちてくる。

リュウ・リストパトは、手袋を外した左手を上高く伸ばした。

一枚、二枚……。

譜面だった。

おそらくアンサンプル譜のスコア。

いましがたの風に飛ばされてきたのだろう。

リュウは楽譜を手にして、風上の水辺の方に歩いて行った。

木立を抜けた途端、日差しがリュウの青い瞳に突き刺さった。  
しばらくの間、目を眇めてやり過ごす。

光に慣れた頃、リュウの目に飛び込んできたのは、金髪のまばゆいきらめきだった。

彼女がこちらを振り返る前に、すでにリュウには、それが誰だか分っていた。

アンジュの背後の木々の間から、背の高いブルネットの男が現れた。

たとえ夢の中でだって、一度見たら忘れられないような顔だ。

水面に映る空の色のように、冴え冴えと青い瞳。

男は日差しに目を細め、じっとアンジュを見つめている。

この数日、朝に夕にスペンサーは繰り返していた。

まるで暗示に掛けようとでもするかのように。

「……あの夜のことは、すべてお忘れください」と。

その言葉が、繰り返されるにつれて、すべての出来事が、アンジュの中でどこか実体感をなくしていった……。

しかし、今、リュウ・リストパトを見て、アンジュの脳裏に、あの晩のことがよみがえってくる。

どこかおぼろげな、でも、強烈な印象とともに。

あの晩に、彼になにを言われたのかは、もう、よく思い出せない。けれども、あの独特の低く穏やかな声は忘れようもなかった。

急に、アンジュは胸が締め付けらるような気がした。

なぜだかは分からないが、鼓動が激しくなる。

リュウは、じつと固まったようにたたずむアンジュの方へゆっくりと歩み寄った。

「……こんなに寒い中で弾くの？ 今日あの時ほどは暖かくないけど」

アンジュが気づいた時には、リュウは、既にすぐ目の前にまで近づいていた。

アンジュは、リュウが差し出した譜面をおずおずと受け取る。

「……譜読みしてただけなの」

思わずそう答えてしまってから、アンジュはふと気がついた。

あの時って？

なんの話だろう……。彼の部屋にいたときのことではない？

リュウはアンジュの心を読み取ったかのように応じた。

「『ザ・コモン』で。演奏中に居合わせた……ガボットを弾いていた時」

あの時？

そういえば、人がたくさん立ち止まっていた……。

あの時は、とても楽しい午後で。

まさか、その後に自分にあんなことが起こるなんて考えてもいなかった……。

アンジュのエメラルドグリーンが目が涙で潤む。

「なにか、いやな思いをさせてしまったかな……」  
リュウはアンジュの涙に戸惑った。

——良く考えてみれば、俺になど逢いたくなかっただろう。  
そう思いつき、リュウは黙ってその場を立ち去ろうとした。

その瞬間、アンジュが口を開いた。

「あの、リュウ？」

リュウは振り返り、無言でアンジュの淡いピンクのくちびるを見つめた。

彼女の次の言葉を待って……。

「助けてくれて、どうもありがとう……あの時はなんにも言えなくて」

アンジュが、スペンサーにいくら訊ねても無駄だったのだ。

助けてくれた人にお礼を言いたいと言って。

「わたくしがすべて対応いたしました。もう、あの方々のことはお忘れください、アンジュ様」

何度頼んでも、こう返されて同じだった。

そして、最後にはこう付け足すのだ。

「これはすべて、アレックス様もお認めのことですので」

アレクの言うことは、スペンサーにとって、そしてライブハルトの家にとって絶対だった。

……当主アーレンド・D・ライブハルト上院議員の次に。

アンジュの礼の言葉に、リュウは微笑みで応じた。

「あの件に関しては、みな忘れたということで、俺は構わないから……」

リュウの言葉に、アンジュの表情がわずかに疑問で曇った。

「詮索するなど、あのコーチジャケットの男からも釘を刺された。スペンサー？　といったか」

淡々と答えるリュウを見て、アンジュは以前から疑問に思っていたことを、思わず口にしていた。

「どうして……？　どうしてなんにも驚かないの？　なぜそんなに平気な顔しているの、だって……」

兄たちから、シフターについて詳しい説明を聞いた自分ですら、こんなにもショックを受けているというのに？

リュウは、ふと自分が右手だけ手袋を外し忘れていることに気が付いた。

「驚いていないわけがない……とても驚いたさ」

静かに言いながら、ゆっくりと手袋を外す。

「……ちつとも驚いてるように見えないけど」

アンジュが、さも腑に落ちないといった口調で言い返すと、リュウは小さな笑い声を立てた。

「難しいこと言わないでくれ、アンジュ？ 俺の感情が分りにくいってことは、周囲の人間によく責められる点だが……」

リュウは笑いながら続ける。

「それを変えるのも、なかなか難しいんだ……悪いが」

リュウがわずかに青い目を細めて、アンジュを見つめた。

「責めたりするつもりなんかじゃ……ごめんなさい」

アンジュはふと目を伏せる。

長い金色の睫毛が、頬に長い影を落とした。

すると、また突風が水面を渡って吹きつけた。

アンジュが短く悲鳴を上げる。

リュウが、譜面を持つアンジュの手をそつと支えた。

「ともかく、もう少し暖かいところに移った方がいいと思うが？  
アンジュ」

リュウが穏やかな声で言った。

ちょうどアンジュの耳元で、その低い声が響く。

「……リュウはどうして、こんなところにいるの？」

リュウがゆつくりとアンジュから離れる。

「仕事で……」

……仕事？

リュウは、アンジュの顔に大きなクエスチョンマークを見てとったが、それに答えるのは躊躇した。

——むこうの奥で男の変死体が発見されて、など。  
たいがい人間は、あえて聞きたくもないだろう……。

ザ・フェンズは長細い緑地だ。

おそらく、彼女は逆の方、南側から入って来たのだろう。そうではない、この騒ぎに気づかないわけがない。

「もしかして、あのサイレンの音と関係がある……？」  
アンジュの問いかけに不意をつかれ、リュウは返事のタイミング逸した。

少しの間、ふたりは沈黙した。

しかし、やがてリュウが口を開いた。

「……どうしてそう思った？」

アンジュはわずかに首をかしげて見せた。  
そして、リュウの手元に視線を投げた。

「その手袋……寒い時にする手袋とは全然違うもの」  
そう言っ、ふたたび、リュウのブルーの瞳を覗き込む。

リュウが手にしていたのは、ビニール製のディスプレイザブルの手袋だった。

……なるほど、お嬢さんをみくびっちゃいけないな。

リュウは、微笑みを禁じ得なかった。

「ご明察、アンジュ。だから、もうここから出たほうが良い」

こう言ってリュウが踵を返そうとした時、アンジュがまた口を開いた。

「あの……リュウの名前」

「リュウ・リストパト、ボストン市警の刑事だ」

リュウが短く答える。

そして、こう付け足した。

「アンジュ、君の名前は聞かないでおく」

そのまま、リュウは、木立の中へと歩み去っていった。

その背中を、アンジュはじっと見送っていた。

\*\*\*\*\*

リュウが現場に戻った時、死体袋のファスナーが閉められたところだった。

「なんか面白いもの、見つかったか？」

マンチ刑事が、リュウに声をかける。

「……特には」

リュウはそう答えながら、運び出されていく死体袋に視線を向けた。

その瞬間、リュウの頭の中に激しい閃光が走り、続いていくつかの映像がフラッシュバックした。

旧市街の袋小路……。

暗い石畳の上に、横たわる男。

白い翼の少女……。

男とその奥に飛ばされた靴。

…… クラークスのスリッポン。

バイオリンケース。

男の首筋に手を当てる。

指先に感じる脈動。

男の白っぽい上着……。

気がつくともリユウは、車に引き上げられようとするストレッチャーを引き留め、乱暴に死体袋のファスナーを引き下げていた。

## 予兆と発展（１）

19

スペンサーがビーコンヒルのフラットの様子を見に行くということで、アンジユも、行って、一晩泊まることにした。

週末でもあり、次の日にナシユアストリート刑務所の慰問の予定だったから、ちょうどいいと思ったのだ。

スペンサーが、サフォークの監獄と呼ぶこの刑務所は、出来て二十年ほどになる。

アンジユの感覚では、刑務所といえば、当然ナシユアストリートにあるものことだ。

しかし、スペンサーなどからすると、刑務所といってピンと来るのは、かつてチャールズストリートの病院の側にあった物の方のようだった。

碁盤の目のような石畳の路地に、瀟洒なジョージアのレンガの家並みが連なるビーコンヒルの中でも、もつとも『ザ・コモン』に近いところに、ライブハルトのフラットがある。

そのアパートメントのフロアー二階分、最上階とその下の階すべてがライブハルトの家だ。

アンジユの祖父が、バックベイに家を建てるまでは、随分と昔からここに住んでいたのだという。

ライブハルト上院議員も、このビーコンヒルのフラットには思い出が多いようで、アンジユは時折、その頃の話をお父さんから聞くことがあった。

アレックスが、州上院議員だった頃はここを使っていたが、今のところ誰も住んでいない。

アンジュは、窓辺の長椅子に座り、その背に顎をのせて雨模様のザ・コモンを眺めてやっていた。

——あの日……彼はあそこにもいたのだ。  
彼もバイオリンを聴いていたなんて。

リュウ・リストパト……。

ザ・フェンズで逢ったとき、刑事だと言っていたけど……。後になって、バックベイフェンズで死体が発見されたことをニュースで知ってとても驚いた。

そういう仕事の人だと、あんな風にいつも冷静に見えるものなのかしら？

冷静といっても……。

お父様やアレク兄さまとは、ちょっと違うような。

アンジュはリュウの顔を思い出す。

僅かに目を細めて、自分を見下ろす表情……。

あんな風に見つめられると、とても不思議な気持ちになる。

顔つきが印象的だからそう思うのかもしれないけど。

アングロサクソンにはまったく見えないし、オリエントでもないような。

フェンズでリュウに逢ってから、アンジュは次第に、あの晩のこと

をはつきりと思いだすようになっていた。  
あのシェイプシフトした夜を。

——大丈夫……落ち着いて。

——何も怖がらなくていい…… ゆっくり、息を吐いて。

リュウの低く穏やかな声がよみがえる。

その声は、とても気持ちを安堵させるようなものだったはずなのに、  
今、思い返すと、なぜだかギュツとつかまれたように胸を疼かせる。

わたしがもとに戻るのを手伝ってくれた、あの赤い髪の……。

あの人「シフター」なのだと言われてみれば、とても合点が行く。  
彼が周りにいる他の人とは、全然違っていろいろのは、すぐに  
分かった。

でも、それは、アレク兄さまやヘンリー兄さまが周囲の人から、浮  
かび上がって見えるのと同じだ。

しゃべり方や見た目やふるまい方など、まったく共通するものはないのに、  
あのストロベリーブロンドの人は、兄さまたちと、どこかしら似ているのだ。

でも、リュウは……。

いままで出会った誰とも違ってしている。

濡れた窓越しに、ザ・コモンの緑にぼんやりと視線を投げながら、  
アンジュはそんなことを思い返していた。

スペンサーが、自分に何度も呼びかけていたというのに、しばらく  
の間、まったくそれに気がつかなかったくらいだった。

スペンサーが、心配げな表情で傍に近づいてくる。

「……いいえ、スペンサーなんでもないわ。どこも具合なんか悪くないの」

アンジュは慌てて取り繕う。

ザ・フェンズでリュウに逢ったことを、なんとなく、アンジュはスペンサーに話せないままだった。

昨日から降り続いていた雨は明け方にあがり、朝にはきれいに晴れ渡った。

だが、冷え込みは一段と増している。

じきに、雨は雪へとかわってゆく。もう冬はすぐそこまできていた。

ナシユアストリートの西、赤茶の長方形の建物の前に、スペンサーが車を泊めた。

「他の皆様がおつきか、見てまいりましょう」

スペンサーはこういつて、シートベルトのバックルを外した。

「アンジュ様は車でお待ち下さい」

スペンサーは周囲の道と車をゆっくりと見ながら、背筋を伸ばして颯爽と歩いていた。

ジャケットのベントが、何度もめくれている。風が強いようだ。

銀色になった髪が与える印象とは裏腹に、スペンサーの身のこなしはきびきびと若々しい。

アンジュは車の窓越しにスペンサーを眺めながら、そういえば、彼

は一体、何歳なのだっただろうか、と考えてみる。

「まだ、どなたもいらしていないようですね」

運転席に戻り、スペンサーは言った。

一瞬だけ、冷たい風が車の中に吹き込んだ。

「……そうみたい、きっとジョージが遅れてるのだと思うわ」  
こういつてアンジュは、薄桃色のくちびるをほころばせた。

「それは……チェロの方ですね？」

スペンサーが訊ねる。

「そうよ、いつも遅れてくるんですもの、テオがきつと怒ってるわね」

アンサンブル仲間の話を、アンジュは家で、そうたびたびするわけではない。

しかし、たとえ、たった一度聴いただけでも、スペンサーはその内容をしっかりと覚えているのだ。

近づいてくるブルーのマツダが、ルームミラーに映った。

「……あ、ジョージの車」

アンジュが気がつき、声を上げた。

運転席からジョージが、後部座席からテオジーンが降りてくる。  
テオはさも嫌そうな表情で、ジョージのチェロケースを下ろすのを手伝っていた。

アンジュは車から飛び出して、マツダの方へ向かう。

「ジョージ！ テオ！」

アンジュの呼びかけに、テオジーンが大きな身振りで振り向いて見せた。

「聞いてくれよ、アンジュ。こいつさ、とんでもないぜ。この寒空の下で、俺を何十分待たせたと思う?!」

コーンローに編んだ髪が、左右に揺れて、髪飾りがチリチリと音を立てていた。

「……テオ、すごく可哀そう」

くすくすと小さな笑い声を洩らしながら、アンジュはこう言ってテオをハグする。

「待ってくれて、これには理由があつてね。アンジェリク」

ジョージが横から慌てて口をはさむ。

「こいつの理由<sup>わけ</sup>なんて、どうせいつもと同じで、彼氏とケンカしたとか……」

テオがジョージを遮った。

しかし、テオも途中で口ごもり、ハグしているアンジュの後ろに、ふと視線を向ける。

「アンジュ様……」

スペンサーがコートとバイオリンケースを持って、すぐそばに控えていた。

アンジュがテオから体を離した瞬間、スペンサーはアンジュの背中に沿わせるようにコートを滑らせた。

こんなにもなめらかに、人にコートを着せることができるものか？  
と誰もが感心するような手際の良さだった。

「では、午後三時三十分に、ここにお迎えにあがります」  
スペンサーは、バイオリンケースをアンジュに手渡して、車へと戻っていった。

「……執事、『エスカレード』運転するんだよな、カッコいいじゃない？」

運転席に乗り込み、エンジンをかけるスペンサーを見ながら、テオがわざとらしくつぶやいてみせた。

銀のエスカレードには、ビーコンヒルのステッカーが貼られている。それを見たジョージが軽く口笛を吹いて見せる。

「執事、じゃないわ。スペンサーよ」

アンジュが訂正すると、ジョージが横から口を出した。

「だから、バトラーのスペンサーなんだろう？」

「違うもの、バトラーじゃないわ」

「じゃあ、何？」

テオがヴィオラを肩に歩き出す。

「何って……それは、スペンサーは……スペンサーだもの」  
アンジェリクは困った拳句にこう答えた。

何歩も遅れて、ジョージがチェロケースを抱えながら、さも愉快そうに笑っているテオジョーンを追いかける。

「おい！ 待てよ、テオ、アンジュ。僕の持ってる書類がないと中に入れないんだぜ」

## 予兆と発展(2)

20

アンジュ達を案内してくれた<sup>刑務官</sup>シェリフは、なかなか友好的な態度を示してくれていた。

はじめて刑務所内に入るといので、緊張気味だったアンジュも、そのおかげで、少し気持ちがほぐれた。

「この部屋を使ってください、トイレはななめ向かいに。廊下の鉄扉の外には出ないように」

そう言うてから、アンジュとまだそう歳の変わらないくらいの若いシェリフは、笑顔で付け足した。

「……といっても、あの扉、鍵がないと絶対に開きませんけどね」  
シェリフが部屋を出ていくと、テオジーンが大げさに溜息をついて見せた。

「やつぱり、けっこう、物々しいものなんだな？」

そして、テオジーンは、チョコレート色の大きな目をアンジュに向けた。

「大丈夫？ アンジュ」

アンジュは、目を見開いて頷いた。

「……ちよっと緊張しちゃった、だって」

ジョージもテオも、じつとアンジュの口元に目をやり、次の言葉を待った。

「もう、ここからは勝手に出られないんでしょう？ 何だかわたしたちも閉じ込められたような感じ……」

そう言っではみたものの、アンジュは気を取り直して、笑顔をつくってみせた。

テオジーンとジョージも、つられて微笑む。

「なあ、ジョージ。あのシェリフ、ゲイだと思う？」

テオジーンがジョージに問いかける。

普通に考えれば、随分と失礼なふざけようだが、このきわどさもテオジーンならではだった。

「おい、テオ。聞こえるぜ？ 彼、たぶん、部屋のすぐ外に立って待ってるんだから」

ジョージが小声でテオを制する。

しかし、さらに小声で、ジョージはこう続けた。

「……ま、97.5%、ゲイだろう」

一瞬の間の後に、テオとジョージが一齐に嘖き出す。

「だと思った、タイプか？ ジョージ」

テオジーンが笑いながらささやいた。

「ブロンドは割とね。でも、ちょっと若すぎるかな」

ジョージが答える。

ジョージの遅刻癖を、なんだかんだと怒りながらもテオは、ジョージと仲が良かった。

歳の割には随分と子供っぽくふざけあっているヴィオリストとチェリストのやり取りを聞きながら、アンジュは桜色のくちびるをほころばせた。

——たぶん、わたしの気分をほぐそうとしてくれてもいる。  
アンジュには、二人の気づかいが分った。

ファニョラを取り出して構える。  
アンジュは、チューニングを始めた。

と、アジャスタから手を離れた途端、E線が切れた。  
ひりつくような鋭い痛みが、アンジュの小指に走る。

アンジュの指から手首にかけて、血がつたった。

粘度のある赤黒い液体を見た瞬間、アンジュの中で恐怖が沸き起る。

それは真つ白な火花のようにはじけて、アンジュをパニック寸前に陥れた。

手のひら、顔が冷たくなり、肩が激しく震える。

どんなわずかであっても、誰のものであっても、アンジュは血が苦手だった。

幼いころは、もっとひどかった。  
血をみても卒倒しないで踏みとどまれるようになったのは、ほんの数年前からのことだ。

小さく悲鳴をあげて、バイオリンをテーブルに置いたアンジュの方を、ジョージとテオが振り返る。

「結構、深く切れたんじゃないか？」

ジョージがアンジュの手首を取って、ハンカチで血を拭う。

「……平気、すぐにふさがる」

アンジュはなんとかこう口にしたが、顔面は蒼白だった。

傷が大したことないことくらい、自分でもわかっている。  
理性では。

ただ、この血の色が……。

この匂い。

口の中にいっぱいに錆のような味が広がる、この匂いが。

……もう、自分ではどうすることもできない恐怖にとらわれる。

「でも、結構、血が出てる。シェリフ呼んで、バンデージかなんか貰おう」

ジョージはそう言って、ドアの方へ向かった。

……違う。傷なんか、本当になんでもない。

いつだって、こんな傷、本当にすぐに治ってしまうもの。

不思議と治らないのは、あの注射の痕だけ。

あの激痛を抑えるために、スペンサーがいつも使っていた……。

なのに……どうして？

どうして、血がこんなに怖いのか？

瞼を閉じて、浮かび上がる赤黒い血の色……。

目の前に一面の血。

なぜ、いつも同じ景色が見えるの？

ふと気がつくと、先ほどのシェリフがアンジュの左手にネオスポリンを塗っていた。

「……こんなに血が出るほど切れてるようには見えないけどなあ」  
シェリフが不思議そうに言って、バンデージを巻く。

「あの……どうもありがとう」  
血もきれいにふき取られていた。

シェリフに礼を云えるほどには、アンジュの気分も落ち着いた。

ジョージも、礼の代わりにシェリフに笑顔を向ける。

ジョージ・コーエンは、チェリストとしては、まだ若手で末席に近いポジションではあったが、笑顔にかけては、ボストン・シンフォニー・オーケストラBSO No. 1という称号を得ていた。

どこかの雑誌がそんな企画を立てて、記事にしたくらいで、本当に心をギョツとつかまれてしまう笑顔の持ち主だった。

シェリフは、ジョージに笑いかけられ、照れたように頬を赤らめる。  
そんなシェリフの様子を、テオが面白そうに見つめている。

ジョージがその意味あり気な視線に気がついて、テオジーンを軽く睨みつけた。

準備を済ませたアンジェリク達を、ふたたび先ほどのシェリフが先導する。

「荷物って、ここに置いておいていいのかな？」  
テオジーンが訊ねた。

「ああ、貴重品は身につけておいて。でも、ここには誰も入れないけどね、何度も言うけど」

シェリフは、さらにフレンドリーな口調だった。

「あと。いるかもしれない物は、念のため持つて行っておいて、取りに戻る時は、いちいち、廊下のあの鉄扉の鍵を開けないといけな  
いから面倒だし」

控室のドアには鍵はついていなかった。

……廊下の鉄扉からはこちら側には、簡単には入れないのだから、その必要もないのかもしれない。

テオジーンはそう考えた。

ちょうどその鉄扉のところで、アンジュ達は向かい側から歩いてくる牧師と行き違った。

牧師だとわかるのは、彼がローマンカラーの白いシャツを着ているからだった。

そのほかは、ごく普通の黒っぽいスーツ姿の、とりたてて印象にも残らないような男だ。

「……この奥を囚人の告解用に使ってるんです。あとボランティアとか学生のリサーチなんかも受け入れて。そのためにも使いますし」

訊ねもしないのに、ブロンドのシェリフが説明をした。

主に、ジョージに向かってだ。

そんなシェリフを目ざとくチェックしながら、ジョージのヤツをまた後でからかってやろうと思い、テオジーンは心の中で笑いを押し殺した。

### 予兆と発展(3)

21

「意外と受けたな……」

口調は素っ気なかったが、テオジーンの暗褐色の瞳は、興奮と満足できらめいている。

さすがに、3度目になったところでカーテンコールの手拍子は看守に押しとどめられた。囚人達は房に戻るため、列を作らされる。いまだ興奮さめやらぬ囚人のひとり、ジョージに向って、今回の選曲とベートーベンの解釈について、まだ熱弁をふるっていた。しかし、すぐにシェリフに列へと引き戻される。

アンジェリク達は、囚人の隊列が娯楽室から去っていく姿を、見送るともなく見送った。

「どこにでもいるものだね……クラシック・マニアっていうのはさ」

囚人達からの握手攻めと質問攻めに、ジョージはやれやれ、といった感じのようだ。

「現役のパストン・フィルのチェリストが、何を言うんですか」  
ジョージの微笑みに頬を赤らめていた件のシェリフが、すかさず口を挟む。

「そう、ここはパストンだぜ？　なんといっても」テオジーンも続ける。

アンジェリクは、ファニヨラのペグをごくごく軽く緩めながら、囚人達の列に掛かる遠い号令を聞いていた。

機械的で威圧的なシェリフの号令と、鉄格子の閉まる音。どれも普段のアンジュの生活ではまったく耳にすることのない物音だ。

……ここにいる人たちは、みな何かの罪を犯している。

刑務所に来ているのだ、当たり前のことだったが、あらためて、アンジュは胃の中に重い物が沈み込んでいくような気分になる。

ほんのさっきまで、音楽に陶醉し、喜びに目を輝かせた幸福そうな表情の聴衆の中で演奏していたのだ。自分がいまどこで、誰を相手にしているかなんて、すっかり頭から消え失せていた。

「疲れた？ アンジュ」

ジョージが微笑みながら、アンジュの顔を覗き込んだ。

本当に、この微笑みに心動されない人間など、そうはいないだろう。生まれたての動物の仔が、人の口元を思わず、ほころばすのと似ているかも知れない。

「ちつとも。喜んでもらえて良かった……」

アンジュも微笑する。

部屋に幾人かいたシェリフ達の目が、思わずアンジュに釘付けになった。

「さあ、控室へ戻りましょうか、いくつか埋めてもらいたい書類もありますし」

テオとジョージにガイ疑惑をかけられた件のシェリフですら、アンジュの微笑みには目を奪われていた。

廊下を歩いて行く。突き当たりの鉄扉が開いて閉まり、またしばらく歩く。

足音だけが響いた。そして、時折、そこにテオジーンのハミングが混じる。

アンジュ達を部屋に入れると、シェリフは書類を取つてくると言い、ふたたび出て行った。

「今回は、テオのことで必要だったからだけど……こういうのは、またやつても良いと思ったよ、僕は」

ジョージはテーブルの上に置いたチェック柄のサーモス魔法瓶を手に取りながら言った。

そして、ふと気がついたように、サーモスの下に置いてあったハンカチーフを自分のスラックスのポケットに入れる。

アンジュもジョージを見ながら頷く。

誰かに必要としてもらえる。その実感が幸福を与えてくれた。

相手よりも自分の方が、より多くの喜びを得させてもらっているのではないか。さきほどから、アンジュは、胸に沸き上がる暖かい感謝の気持ちを噛みしめていたのだった。

「そういつてもらえると、ありがたいよ。ともかく今回のことについては、二人に協力してもらえて……」

テオジーンという言葉が途中で止まる。

と、同時に、ジョージの手から落ちたサーモスのカップ型の蓋が、リノリウムの床に当り、乾いた音を立てて転がった。

アンジュが顔を上げて、ジョージを見た。

ジョージは両手を開いて、胸元に持っていこうとする。驚きの入り交じった当惑の表情を浮かべ、目を見開き、自分の両の掌を、まるで初めて見る物のように見つめた。次の瞬間、ジョージは膝を折るように、床にくずおれた。

テオジーンもアンジュも、身体が固まってしまったかのように動けなかった。

短いうめき声を、二つ三つあげ、ジョージはぴくりとも動けなくなっていた。

「ジョージ、おい、ふざけるなよ……」テオの声は震えている。

アンジュは床に膝をついて、ジョージの上にかがみ込む。ジョージの名を呼びながら、そつと肩に触れた。

アンジュが手を離すと同時に、ジョージの身体は力なく傾く。

部屋に入ってきた瞬間、シェリフも異変に気が付いた。

ものすごい勢いで近づいてきて、アンジュの身体を、乱暴にジョージの側から押しのける。

床にかがみこむと手慣れた様子で、シェリフはジョージの首筋に手をやる。

先ほどまでのフレンドリーな若者、といった様子は消え失せ、刑務所のシェリフが特有に浮かべる、あの険しい表情を顔に貼り付けている。

「死んでる、何も触るな」

シェリフはテオとアンジュを睨み付けるようにしながら、立ち上がった。

手袋をした右手で拳を握り、一瞬、狙いをつけるように間を置くと、シールドが張られた非常ベルのボタンに向って、シェリフは強く拳を打ち付けた。

けたたましいベルの音に、アンジュの身体がびくりと痙攣する。

刑務所中に響き渡る非常ベルが、他のすべての物音をかき消し、慌ただしく動き回るシェリフ達の姿を、まるでスラップスティックのサイレント映画のように見せていた。

## 特命と私情

22

オレンジ色のシートに包まれたジョージを載せ、ストレッチャーの台が引き上げられる。

彼の家族の連絡先は？ と声をかけてきたのが、制服を着た警官だったのか、それとも刑務官だったのか。

さっきまで笑ってた、ジョージ。

……嘘みたいだ。

みんな、大きな水槽の向こう側にいるみたい。アンジュは壁際の椅子に座り、部屋の中をぼんやりと見やる。

テオジーンは、聞かれたことに答えている。

ええ、彼の家族はマサチューセッツにはいないんです、パートナーと同居してました。

連絡先？ 知らないよ……それは、ジョージの携帯になら、入ってるんじゃない？ 自宅の電話番号だったら分るけど。

名前？ たしか、ハッサンとか。そう、だから結婚はしてなくて……。

「……アンジュ様！」

その声の主が部屋に入ろうとするのを、戸口の警官が押しとどめる。

「スペンサー？」

スペンサーは何事かを警官に告げる。警官は一瞬、表情をこわばらせたが、すぐに身体を傾けてスペンサーを部屋へと通した。

アンジュの側まで来て跪くと、スペンサーはふたたび声をかけた。

「アンジュ様、どこかお具合の悪いところは……？」

アンジュは、無言で大きくかぶりを振る。

「ジョージが、ジョージ……」掠れるように途切れて、それ以上声が続かなかった。

アンジュは、ただ揺れる瞳でスペンサーの灰色の目を見つめる。

約束の時刻の二十分前に、スペンサーは『サフォークの監獄』の前に辿り着いていた。

しかし、市警と州警察のパトロールカーが道を塞いでいた。救急車も一台停まっている。

スペンサーはしかたなく、門からかなり離れた場所にエスカレードを停めた。

車から降り、急ぎ足で警官たちの方へ向かう。

門の内側では、シェリフが幾人が固まっており、警官と声高に話し合っている。

なにやら、ひどく取りちらかっているようだ、スペンサーは誰に声を掛けるか、様子を伺った。

ナシユアストリート刑務所、サフォーク郡の矯正施設である。

だから、スペンサーはここを『サフォークの監獄』と言い習わしているのだ。

マサチューセッツでは、今では郡の業務のほとんどは州に移管され

ている。郡境は地図上の物に過ぎない。ただ、矯正分野、刑務所等の運営に関してだけは、この自治区割が残存していた。

囚人が起こしたトラブルなら、郡のシェリフが主たる責任を負うし、予算、施設の問題に関しては、実務上は州の担当だ。

だが、刑務所内でもし、イレギュラーな何が事件が起きたなら、サフォーク郡、州、市との関係は相当に面倒なことになる……。

目の前のごたついた状況に、スペンサーはただちに、中で何か普通ではない事態が起きていることを察した。

……なんということだ、アンジュ様が、まだ中においでになるに違いないのに。

問いただす市警の警官も州警察官も、刑務官シェリフすら、ろくに事情を説明できないばかりか、スペンサーをただ追ひ払おうとするだけで、埒が開かなかった。

忸怩たる思いではあったが、スペンサーはアレックス・ライブハルトに連絡するほかはないと決断した。

アレックスを煩わせるなどと、まったくもって恥じ入るところではあったが、中にいるアンジュのことを考えれば、迷う僅かの時間も惜しかった。

現職の州上院議員であるアレックスの力を借りるしか、状況を迅速に打開できる方法はないのだ。

五分後、スペンサーは『サフォークの監獄』の中に足を踏み入れた。その時点で、スペンサーが解っていたのは、刑務所内で施設職員でも囚人でもない者が死亡したらしいということだけだった。

覗いた部屋の中に、美しい金髪がきらめいているのを見たとき、ス

ペンサーは安堵のあまり、膝が震えそうになったほどだった。

怯えきっているアンジェリクに、コートをかけ、椅子から立たせようとしたところで、男がスペンサーに声を掛けた。

「おい、勝手にここに入ってもらっちゃ困るな、あんた」

テオジーンを質問攻めにしていた州警察の刑事だった。

スペンサーは、その刑事の横柄な物言いを、完全に無視した。刑事は、露骨にムツとした表情で、スペンサーの肩に手を掛ける。

「おい、誰の許可を得て……」

刑事が言いかけた瞬間、スペンサーが、とある地区検事の名を口にする。

市警の制服警官がやってきて、スペンサーの肩に置かれた刑事の手を退かし、やめておいたほうが、と目配せを試みせた。

地区検事の名を聞き、目を見開いて驚きはしたものの、まだスペンサーに対し、険悪な表情を露わにしているその刑事に、警官がぼそと耳打ちをする。

……ライブハルト、と警官の口から漏れた瞬間、刑事も事態をやつと飲み込んだ。

「彼女の持ち物とここでの行動は？ もうリストにしてあるのか？」  
刑事は警官に確認する。まるで、八つ当たりのように威張り腐った口調だった。

警官が頷いたところで、さも仕方なさそうに、刑事はアンジュとスペンサーの方を振り向いた。

「今日の所は、お帰り頂いても結構です、ミズ・ライブハルト。ああ、また色々ご協力を願わなければならぬこともあるかと思ひ

ますけどね……」

慇懃と言うよりは、因縁をつけているとでもいった口調だった。

すっかり荷物をまとめ終えていたスペンサーは、すぐさまアンジェリクの手を取って、歩き出そうとした。

「……テオ、テオは？」

スペンサーに手を引かれ、数歩歩いたところで、アンジェリクが振り返って声を上げた。

特別扱いはあるただけだ、と言わんばかりの表情でアンジュを睨んだ件の刑事は、すぐさまテオへの質問を再開する。

スペンサー……？

アンジュは、スペンサーの灰色の瞳を見上げたが、その目は静かに伏せられる。

すると、テオは「大丈夫、俺なら」と白い歯を見せて笑ってみせた。チョコレート色の瞳は、完全には笑ってはいなかったが、それがテオにできたアンジュへの精一杯の配慮だった。

スペンサーは、テオジーンに丁寧に目礼をして感謝の気持ちを込めた。

そして、まだ何事かを訴えたがっているアンジェリクの手を強く握ると、そのまま部屋から連れ出した。

——旦那様が御留守の間に、なぜここまで色々と。

スペンサーは内心、頭を抱えるような思いだった。だが、当然のことながらそれを表に出したりはしない。

しかし、アンジェリクはスペンサーの感情の変化を感じ取っていた。

ただ、スペンサーのこの困惑と焦りは、アンジェリクにはまるで、苛立ちと怒りのように感じられていた。

強い力で自分の手を引くスペンサーに、アンジェリクは、それ以上、何も声を掛けることができなかった。

アンジュを車の後部座席に寄せ、ドアを閉めたところで、スペンサーの携帯が鳴った。

すぐにポケットから電話を取りだしたスペンサーの表情が変わる。

「……旦那様、はい。アンジュ様はご無事です……かしこまりました、そのように」

手短に通話を切り上げたスペンサーが、エスカレードの運転席に乗り込み、ドアを閉める。

アンジュがもの問いたげにくちびるを開きかけた瞬間、スペンサーがひと言、こう告げた。

「旦那様は、先ほどボストンにお戻りだそうです、アンジュ様」

\*

ナシユアストリート刑務所で人が死んだらしい。

ドージェ・ドナーティが遅めのランチから事務室に戻ると、同僚達が固まってそんな話をしていた。

ドージェの姿を見た瞬間、彼らはわざとらしく口をつぐんだ。だが、シェイプシフトしていない時でも、ドージェの聴覚は他の人間よりもずっと鋭い。何を話していたかなど、すでにドージェには筒抜け

だった。

死んだのは囚人でもシエリフ刑務官でもなく、民間人。面会人なのかそうでないのかは、いまのところ不明らしい。

現場に向かったのは、メタルフレームの厭味なレイナーとそのパートナー、横柄そのものの中年男で、ドージェが名前を覚える気すらしない男だった。

……初動は市警だったらしいから、現場はさぞごたついていることだろう。

ドージェはひとごとのように、思いを巡らせていた。

\*

コーヒーサーバーを手に取ったが、中は空だった。

最近、新しく入ったコーヒーメーカーは、コーヒーが煮詰まらないよう、ヒーターがつく代わりに、サーバーが魔法瓶になっている。それはそれでいいアイディアだとは思うのだが、いかんせん、サーバーの中身が見えない。

注ごとく傾けたが中身が出てこない、という切ない事態にリュウ・リストパトが陥ったのは、一度や二度のことではなかった。

——ちょうどいい。今日はこれで店じまいだ。

コーヒーの品切れを潮に、リュウが帰宅を決めた時だった。ブラインドの向こう、サザビー部長刑事がリュウを見て笑った。

件のチエシヤ猫の笑い……。

……間違いなくやつかいごとの予兆だ。

リュウは、見なかった振りをして、そのままドアからオフィスを出て行こうとする。その背中に、サザビーが呼びかけた。

……何が嬉しいのかスーパーボールバウンシーボールのように声を弾ませやがって  
リュウは湧き上がるいまましい思いを飲み込んでから、振り返った。

「リストパト、仕事だ」

サザビー部長刑事がリュウを手招きした。

## 障害と連絡（1）

23

「……だから、検事は、お前と直接話したいと言ってる」

部屋の中に呼び入れられた時、リュウは「おやおや？」と思っ  
てはいた。

サザビーは扉をしめ、ご丁寧に、仕切りのガラスの壁につけられて  
いるブラインドまで引き下ろしたからだ。

厭味なほど慎重で思わせぶりな、サザビー部長刑事のこんな仕草に、  
リュウは何ともいえない「嫌な」感じを覚えた。

「何のために呼びつけられるのか、指示もないまま検察に出向けと  
？」

サザビーのデスクの前に置かれた古い曲げ木の回転チェアに座って  
いるリュウの口調は、いささか刺を帯びる。

いつそのままデスクの上に足を載せてやろうか、足を組み替えな  
からリュウは考えるともなく考えていた。

大体、『ザ・フェンズ』の死体の件も、まだ片付いていない……。  
理由のわからない話で、ローウェル検事のところまで出向かされる  
なんて、まっぴらだ、リュウは内心で悪態をつく。

「ともかく、オレも詳しいことは聞かされちゃいないんだ、リスト  
パト」

これ見よがしな音を立てて、サザビーがデスクの抽斗を引く。

取り出したのは、マルボロのパックだった。

サザビーが小気味よくパックを振って一本取り出す。そして、口にくわえ、またチェシヤ猫の笑いを浮かべて見せた。

喫煙年数に一日当たりの本数をかけた数が四百を超えると、いわゆる発ガン危険領域に入る、とかいう。

二十一になった時には、そんなものを優にオーバーしていた俺が、どれほど苦勞して禁煙したかを、サザビーは知っている……。

リュウは、その真つ青な目を細め、サザビーを軽く睨みつけた。

——解ったさ。話は終わりで、さっさと出ていけって言いたいんだろ、サザビー？

サザビーはマッチを擦って、再びリュウに目線をやった。

本当に「嫌な」奴だ、こいつは……。

リュウは、ゆっくりと椅子から立ち上がる。

だが、サザビーはリュウの前で、一度も煙を吐いて見せたことはなかった。

そして、サザビーがこれからも決して、そうはしないだろうということが、リュウにも分っていた。

黙ったままサザビーに背を向け、リュウはドアの方へと歩き出す。炎が指先をかすめそうになり、サザビー部長刑事は持っていたマッチを灰皿に投げ入れた。啞えていた煙草を手に取ると、パックに戻して、抽斗に放る。

リュウが扉を閉める音と、サザビーが抽斗を閉める音が、ほぼ同時に響いた。

\*

ビーコンヒルのフラットにスペンサーとアンジュが帰りついた時、中からドアを開けたのは、当主アーレンド・D・ライブハルトだった。

トパーズ色に輝く気品に満ちた力強い瞳が、最愛の娘を見つめた。アンジェリクは父親のシャツに顔をうずめ、プルメリアの花のようになかすかなコロンの香りをかぐ。広い背中に腕をまわし、スーツのジャケットを握りしめた。

暖かく大きな父の掌が、背中を愛撫し、髪を撫ぜ、頬をさするのを感じ、アンジェリクの薄紅色のくちびるからは、安堵の吐息のように嗚咽が溢れ出した。

泣き疲れて眠る娘を胸に抱いたまま、アーレンド・ライブハルト連邦上院議員は、ソファアに腰を下ろす。そして、スペンサーの差し出したクリスタルのタンブラーを、片手で受け取った。

「申し訳ございませんでした、旦那様」

スペンサーは、頭を下げたまま動かない。

アーレンドはスペンサーに視線を向けず、グラスに口をつけた。強烈なピートの香りがアーレンドの鼻を抜ける。

ふた口目のスコッチを舌の上で転がしてから、思い出したように、アーレンドはスペンサーに目をやった。

「謝らねばならぬようなことを、何かしたのか？ スペンサー」

「……アレックス様に取り計らいを申し出ました」  
スペンサーは短く即答する。

「仕方なからう」

アーレンドはタンブラーをサイドテーブルに置く。

「それに……」

スペンサーは言い継いだ。

「……アンジュ様の覚醒のときにも、おそばには居られずに」

アーレンドは娘の金の巻き毛に、そつと指をからめた。

「『それ』はいつ起こるかも分らなかったものだ、その後は迅速に対応してくれたと、アレックスから聞いている。問題はない」

スペンサーはまだ頭を下げたままだった。

「シェイプシフトを目撃した者たちは、両方とも警察官だったとか」  
アーレンドはグラスを再び手にして、すべて空けた。

「はい……片方はシフターで」

スペンサーは、なめらかにグラスを下げる。

「偶然か？」

アーレンド・D・ライブハルトは、スペンサーの目を見据えた。  
質問ではなく、それは確認であった。アーレンド自身の結論は、すでに  
に出ている。

スペンサーには、主の言葉の意味が明確に理解できていた。

スペンサーは、ただ静かに頷き、シングルモルトを満たしたグラス

を差し出す。こうべは垂れたままだった。

まあいい、と言いたげに、アーレンドは瞼を軽く動かして見せる。

「……『呼ぶ』もののだろうか」

アーレンドがぼつりと洩らす。スペンサーはその意味を測りかね、視線を上げて主を見上げようとした。

その瞬間、ドアベルが鳴る。

スペンサーは今一度深く頭を下げ、玄関ホールへと向かって行った。

アーレンドは再び娘の髪を愛撫しながら、誰もを魅了する独特のビブラートを帯びた低い声で呟いた。

「さて、『どちらが』呼んだのか……『どちらを』呼んだのか……」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5282x/>

---

11月とすべての後で

2011年12月5日10時52分発行